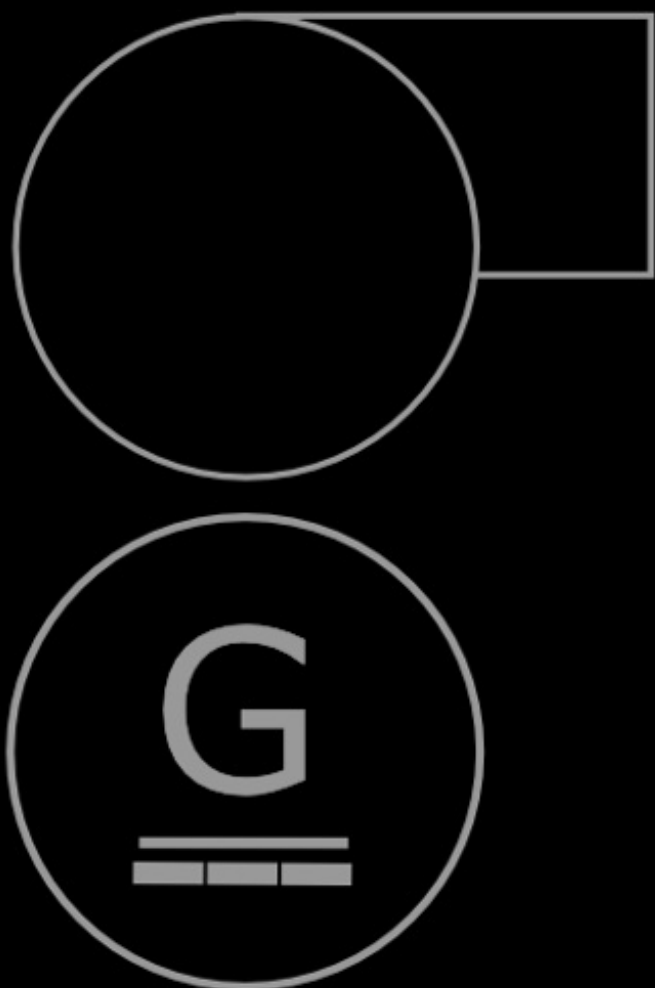


ステーション ブラックアウト

Station
Black Out



米田淳一

改訂記録 (7/1)

- ・ 改訂記録

2011/7/1 1日目の1号機中央操作室の様子を増補改訂しました。

私は、あの建物を、6人の兄弟と呼ぶ。

当時、日本では1945年に終わった太平洋戦争の爪痕が残っていた。

その後、傾斜生産方式と呼ばれた石炭増産で、必死に復興を続けていった日本。

しかし、その炭鉱では落盤や粉じん爆発・ガス爆発が続き、犠牲者が多く出ている。

そこでより安く、より安全な石油への転換、エネルギー革命が始まった。

1944年、美唄炭鉱で爆発事故。死者109人。

1945年、太平洋戦争終戦。

1950年代、テレビでは原子力に期待する番組が次々と放映された。

1954年、第5福竜丸被曝事件が発生する。

危険区域を見誤った核実験で死の灰を浴び、被爆者2万人、同船の船員23名も全員被曝。

その無線長は「原水爆による犠牲者は、私で最後にしてほしい」との言葉を残して息を引き取り、そこで強烈な反核運動に火がついた。

1955年、原子力基本法成立。

1957年、ウインズケール火災事故。しかし当時のイギリス・マクミラン政権は隠蔽。

1961年、軍用試験炉SL1事故。死者3名。

1963年、東海村の実験炉が発電を開始する。

県も焦っていた。常磐炭田の発展に頼りすぎ、産業近代化が遅れた福島では、新たなエネルギーを求めている。

1963年11月9日、三井三池炭鉱で炭塵爆発事故が起きた。死者行方不明者458名、一酸化炭素中毒患者839名。戦後最多の死者数だった。

その同じ日、国鉄（当時）横須賀線が三重脱線事故を起こした。死者161名、重軽傷者120名。この日は「血塗られた土曜日」と呼ばれた。

そしてその炭鉱事故は原因究明がはっきりしないまま不起訴となり、起訴しようとした福岡地検検事多数が転勤させられた。

鉄道事故は国鉄の責任が激しく追及されたが、運転士たちは「死ねば殉職生きれば逮捕、やっとならぬ安月給」といいながらその後も責任追及重視・原因解明軽視のなか、幾度もその鉄道事故にその後もさらされてきた。

そんな中「彼」は血塗られた事故の3年後、その町で1966年7月満場一致の賛成の歓迎を

受け、製塩の塩田のあとの空き地に、山林原野と、買収した土地の上に作られた。

67年に着工した彼は71年、ついに発電を開始した。

しかしその次の年、その敷地内で小さな火事が起きた。

当時の会社、帝都電力は、反対を恐れて、その小さな火事を隠蔽した。

しかし、その隠蔽は高くつくことになる。

彼は、一人前になったとたんに、無謬と厳罰という呪いをうけたのだ。

1960年 発電所誘致

66年 常磐炭鉱の閉山後事業として常磐ハワイアンセンター開業。

67年 1号機着工

70年 1号運転開始

76年 立地4町三者協定

2号炉の施設で火事 東電の事故隠し。後に告発される。

76年 常磐炭鉱閉鎖。

78年 3号機臨界事故。公表されたのは29年後。

79年 スリーマイル島事故

86年 チェルノブイリ原発事故

90年 3号機圧力上昇事故

98年 制御棒一部抜け事故

01年2月26日 知事がプルサーマル当面許可せずの発表。

02年8月保安院隠蔽情報を公表、運転停止

03年全炉停止

07年3月22日

07年7月24日共産党が安全確保申し入れ

10年2月 プルサーマル開始

10年6月 2号、水位低下事故

小さな事故が起きるたび、会社は隠蔽をし、マスコミと反対派はそれを暴いた。

しかし、会社は無謬と完全な安全を主張し、マスコミと反対派は危険性を主張して原発の廃止を叫んだ。

発電開始から40年後。

30年の寿命を10年延長する工事を受けた彼は、なおも発電していた。

彼の役目を終わらせる廃炉についても、技術的な研究はしても、その廃棄物の処分は具体的に誰も受け入れなかった。

そのままトラブル続きの彼を糾弾する反対派の、3月1日原水爆禁止運動記念日の10日後。
2011年3月11日。

はじまり

1号・2号炉の運転直チームも昼食を終えて、リラックスした空気の中、運転監視を行っていた。

2基の原子炉の運転は2直E班11名が引き継ぎ、順調に460メガワットで運転中だった、外部表示モニタは、暖かなこの春の海岸を映している。

この原発の1号炉は特に熟練のE班当直長のもと、チームが一番良好な緊張と余裕の状態にあった。

当直長・本村のもと、主任の松本、操作員の三宮、操作員補が2名。研修生の1名はOJTの横山で、それを操作員の桜井が指導する。

当直長の前にテーブル、主任と操作員の前に操作盤。操作盤補の2名の前に大きな表示盤がある。

1号炉・2号炉の中央操作室は隣り合っていて、それぞれに5名・6名ずつのチームで監視している。

1号炉の運転主任の松本が運転日誌に引継ぎ事項を書こうとしていたが、その目がまた表示パネルにうつる。

炉は定格熱出力運転中、安定している。

炉の最低水位は1号が925ミリ、2号が1130ミリ。

燃料プールはオーバーフロー水位付近、たっぷりの水で冷却され、25度から26度で安定している。

「広報のみんなと花見の話、進んでる？」

当直長・本村の言葉で何気ない話が始まる。

「一応内規では私語禁止みたいになってますよね」

OJT・横山が緊張のなか言う。

「やってられるか。俺たちも人間だ。緊張しすぎてもダメ、余裕過ぎるのもダメだ。それが人間工学だよ」

「花見は、いや、どうにも。みんな対策活動には慣れてますが、新入りは辛いらしくて」

対策活動とは反対派への対応である。

「ケアしなきゃな。そういや新卒の子がいたな。大丈夫かな。あの子、結構かわいいよな」

「当直長も好きなんですか？」

「ああ。嫁さんの若い頃を思い出したよ」

「大丈夫ですか」「まあな」

主任操作員・松本がそのとき、監視しながら口にした。

「でも正直、我々も思うんです。」

こんな地震の揺れ対策の手すり一つつけるのにどれだけかかっているんだよ、って」

彼はそうやって制御盤の手すりをかるく叩いた。

「それに操作系も。言いたくないですけど、『畜生、変に整理するからかえってミスしやすいだろ』って、片付けが苦手な友人が『嫁の人が片付けすぎる』って」

当直主任もぶうぶう言う。

「使う人間よりも並んだレバーの美しさだ。フェチなんだ。あいつら。

そういっても、片付けが下手な奴は長生きしない」

「そうらしいですね」

「でも、これからはどんどん設計も変わる。

ここだって地味だけどすこしずつ機器の更新をしている。

そのうえ今度のうちに作る7号とか8号はすごくなるらしいし。

6号どころじゃない。グラスコックピット、というよりあれはもう『スタートレック』のブリッジみたいになってる。まさに未来だよ。

ほとんどをタッチパネルにして、さらに支援システムもさらに賢い。

緊急時に『次の一手』がすぐに表示されるんだ。

この前3Dモックアップを見たよ。あれはいい」

当直長はそう自慢する。

「そういやコンピュータが女流棋士に勝ちましたね」

「ああ。あの技術も間接的につながっている」

「でも俺たちは40年モノのこの子と一緒に」

「じいさんだけだな。

まあ、釜を信じ、釜を侮るな、恐れるなだ。

止めたら何億って請求もくるし、始末書も報告もどっさり書かされるけど、恐れず止めるんだ」

「運転でまず止まれが簡単に許されないのはキツイですよな」

「それは違うよ。簡単に止めても良いんだ。

言ってるだろ、止めるのをためらうな。

一度止めて億単位で金が飛ぶって言われても、人の命がかかっている」

「始末の書類書くのは苦手じゃないんですが」

「いいんだ。それが俺たちの仕事だ。給料分働こう。

それに、安全運転が一番楽しいんだ。

なかなかその醍醐味がわかるのは経験がいるが、運転するのに誇りも、そして少しの楽しみもある。

絶対に安全運転だ。安全運転はいいぞ」

「でもなあ」

「デモはあの連中にさせとけ」

「俺たちの守ってる安全を『確率で語るな』っていいたいですよ。

何ですかこの論文。どんなに確率が低い宝くじでも、当たりくじが絶対にあるって言われちゃうじゃないですか」

「でもその当たりくじを担保に借金したり生活設計する奴いないだろ。普通に考えればそういうことだ。それがリスクってもんだ。

「そーいやよくテレビでやっている保険会社のCFだけどさ」
と彼が言いかけたときだった。

...14:46、地震発生。震度7

あの特徴的な警報音が鳴り響いた。

——緊急地震速報、緊急地震速報！——

「地震だ！」

「揺れが来るぞ！ 揺れに備えろ！ 炉の停止準備！」

大きな揺れの中、みな最近取り付けたコンソールの手すりにつかまってこらえる。

「自動停止作動！ 1号自動停止作動！」

「よし！ いい子だ！ 止まったぞ！」

「1号、2号、3号とも停止しました！ 停止中の4号5号6号、異常なし！」

「よし。喚呼の声が大きくてよかった」

当直長はOJTの操作員補をほめた。

「だが、これからだ。

温度に気をつけろ。炉も燃料も常に発熱してる。

ほったらかしにしたら熱がたまって溶ける。

今の温度からのトレンド確認」

「屋外に確認グループも確認に行ってます！」

「よし、みんな無事だな！」

そのとき、放送が鳴った。

「大津波警報発令中！ 気象庁より大津波発令中！」

東北地方太平洋沖地震。マグニチュード9.0、最大震度7、この発電所で震度6強、設計値の126%もの最大加速度をうけた最初の段階だった。

揺れからすぐに免震重要棟に所長の田山が駆け込んで対策本部が始動した。

「この40億円が役に立ちますね！」

「これが無駄ですめば一番よかったが、そうもいかん！」

この揺れはいけない！

津波が来る！

それもかなりでかいぞ！」

そのとき、さらに揺れがやってきた。

「みんな、つかまれ！ くそ、余震がまだ来るのか！」

「電源が失われました！ 外部電源取り込みのための開閉所・変電施設にダメージ！」

「各炉系で電力を融通！ 冷却を止めるな！」

「気象庁、大津波警報発令！」

時計は15時36分を示していた。

操作員補たちが中央操作室のホワイトボードに操作と状況をまとめていく。

このホワイトボードは書かれた内容を保存する機能を持っている。

そこに、この被災時刻が記された、

所長が重要免震棟に入り込むと、すでに多くの人間が対策本部を立ち上げていた。

「状況把握班の準備をしています」

「大津波警報発令中です」

いくつものディスプレイに表示されているのはERSS、緊急時対策支援システムの表示である。

できて1年もたたない真新しい建物のこの免震棟は、40億円で建設された。

免震構造は功を奏し、ほとんどというより全く被害なく、みなが活動していた。

「電源バックアップのディーゼルエンジン、バッテリーの準備オーケーです」

「本店緊急時対策室も立ち上がっています」

「経産省も本部立ち上げてます。

気象庁との連絡もついています。津波到着は16時36分の予想で、」

そういった彼が、一瞬言葉を失った。

「予想波高、14メートルです！」

「くそ！ 高すぎる！」

発電所長は指示した。

「地上要員退避！ 状況把握班も一時退避！

各炉中央操作室確認！

くそ、ほとんどの施設がやられるぞ！」

そのとき、本店とテレビ会議システムの表示がつながった。

本店でも100人体制で呼集がかかった皆が、想定を超える事態に顔を引きつらせていた。

「津波きます！」

防波堤が、排水施設が、そしてタービンと原子炉建屋に大量の海水が襲いかかる。

持ってくれ！

崩れるな！

押し流されるな！

こらえてくれ！

皆がそう祈った。

しかし、それはかなわなかった。

防波堤を乗り越えた津波は、そのままの膨大なエネルギーでそれを破壊し、所内にしびきをあげながら流れ込んだ。

駐車していた車が、トラックが、そしてさまざまなタンクが、その奔流にもみくちゃにされ、配管も電機受電施設もやられた。

タービン建屋も、原子炉建屋も海の中に沈み、そのまた奥の受電設備まで浸水したのだ。

何人かがそれを録画し、撮影していた。

好奇心とかそういうものではない。本能的に撮らねば、録画せねばと思っているのだ。

誰もそれを咎めなかった。

咎めるどころか、みなあまりの圧倒的な惨禍に、気力を失っていたのだ。

「第1波に続き、第2波！」

それでも何人かはこの悲劇に抗うように作業をしている。

「所長」

一人が口にした。

「計測班の一つが退避が遅れて」

「本当か」

「2名、現在連絡不能」

「業務用携帯を呼び出し続けろ！」

所長は叫んだ。

「はい！」

「各炉外部電源喪失！ 内部電源に切り替わります！」

「オフサイトセンター、つながりません！」

おかしい！

「オフサイトセンター、停電でやられています！」

「くそ、あそこの予算けちってたんだ！ でもここまでとは！」

保安院しっかりしてくれ！」

「各炉ディーゼル電源の復旧活動をと」

「できるか？ 無理に復旧しようとしたらそこをさらに津波に狙われる。

慌てるな。津波が引いてから各保全部班、活動再開だ」

悲惨な津波被害もまだ把握できないなか、夜の闇がやってきた。

そのとき、東京の原子力保安院はERSSを構成する予測システムと解析システムを走らせていた。

「くそ、こっちも余震がまだ来る」

ERSSは、原発の状況情報を免震重要棟と各県のオフサイトセンター、そして本店対策室と経済産業省などで共有し、さらにそれを解析・分析、推論して今後の状態の予測と、対応を算出するシステムで、すでに2003年10月から運用開始している。

なかでもDPSとAPSは事故状態判断システムと予測解析システムで、この二つは様々な事態を

想定して推論する日本の原発防災網の頭脳である。

「ERSS予測システムAPSの回答、出ました！」

皆が声を失った。

「炉心露出」

チーフが叫んだ。

「経産省と官邸に報告！ 直ちに！」

炉心露出、それは停止している炉心が冷却水の減少で水面上に出て、自然に発熱する性質を持つウラン燃料が、セラミック化されている状態でいられなくなって溶け出す、非常に重大な事故である。

しかしその外には鋼鉄の格納容器と原子炉容器、コンクリートの建屋がまだ存在している。

そして炉心に注水することで、冷却できれば、まだまだ回復できる。

だが、最大の問題は、そこに注水するシステムのポンプなどの電源がなくなったことなのだ。

原子炉、沸騰水型のこの6基の炉は、冷却に電源を必要とする。

発電所なのに電源が必要というのは不思議かも知れないが、沸騰水型を含め、通常の原子炉はそれを必要とする。だがトラブルがあっても6基ある炉はそれぞれにタービンと発電機を持っているので、互いに電力を与え合って助け合えるはずだし、さらにそれを失っても今度は強力なディーゼル発電機がそれぞれにあって、バックアップするはずだった。

そしてそれが失われても、ほかの発電所からの電力を受電することもできる。

ところが、そのすべての電源をことごとく失ったのだ。

「ステーションブラックアウト」

一人が口にした。

そう呼ばれる想定された最悪の状態が発生したのだ。

「外部電源復旧しません！ 非常電源、運転可能だったディーゼル発電機12機のうち11機起動しません！」

「なぜだ！」

「水没と配管・タンク類の浸水と機器破損で動きません！」

「受電設備も深刻なダメージを受けています！」

「非常灯に切り替え！」

「外電喪失！ 外部電源喪失！ 全交流電源喪失！」

「センサー電源、直流バッテリーに切り替わりました！」

「各炉圧力、温度確認！」

「良い子だから、落ち着いていてくれよ」

1号炉運転チームはステーションブラックアウトの中、表示を監視していた。

途中、次の1直A班がやってきたが、みな一瞬顔をゆがめた。

2直と1直の引継ぎは21時だったが、引き継ぐ1直も早めにやってきて、この悪化しきった事態では帰る気どころか、何かできないかとみな必死だ。

そのうえ応援も来て、その人員を記録するために運転日誌に別紙を加えることになった。

その日誌の、原子炉の状態の「高温停止」の文字が焼きつく。

状態は非情だった。

「くそ、温度が上がってる！ 1号炉、温度上昇！」

「電源はまだですか！ 今すぐ必要です！」

「ディーゼル電源復旧急げ！」

「このままでは保安院の予測通りになります！」

そのとき、運転員の一人が気づいた。

「計測用の直流バッテリー、残量わずかです！」

「くそ、もうそんな消耗したのか！」

「東北電力に電源車を頼むんだ！」

それから非常用マスクの用意と、急いで車のバッテリーもってこい！ あるだけ全部だ！」

運転員の三宮が指示する。

「車のバッテリー?!」

集まったチームが驚く。

「ああ！ ボンネットの中にあるやつだ！ 全部持ってこい！」

圧力計と水位計の電源がなくなったら炉内のすべて分からなくなるぞ！

カーバッテリーでも何でもいい、電源がいるんだ！」

集まりだしたチームがかけ出した。

「訓練した以上の状態で」

そう命令した運転員の三宮が、それを見送った後、計器を見ながら、かたかたと震えている。

「大丈夫だ。全く大丈夫じゃないが、大丈夫だ」

当直長の本村は三宮の背を叩いた。

「最悪の事態だが、悔しいがまだまだこれで終わらない」

バッテリーをつないで、計器用電源を確保しようとする。

中央操作室の床にバッテリーがズラリと並び、それを結線して計器盤に電力を供給しようとする

。

その時、本村は気づいた。

「この音」

異様な音に皆が気づいた。

この中央操作室から炉はそう離れていない。

「まさか」

「水位計確認！」

「ああっ！」

操作員が叫んだ。

「水位計、動作していません！ 15時50分から水位計測不能！」

ロール紙の記録を操作員たちが読み取る。

「くそ！ なんてこった！」

「想像してたが」

みな、目を見合わせた。

「圧力は！」

「上昇続いています！」

「ベントで圧力を逃がさないと」

「その圧力計もあてにならんが、この音だともうおそらく燃料が露出してるだろう」

皆が悔しさをにじませた。

「受電施設の復旧チームからです。地震直後に受電施設に破損箇所あり、受電鉄塔、夕の森線1機が倒壊」

「他の炉の計測電源も失われています」

「電源車は！」

「コネクタ形状が合わないために手間取ってます！」

「ここまでやられるのは想定してなかったからな」

「ああ。ちくしょう、言い訳もできない」

17時47分。

「開閉所の遮断器脱落で使用不能、外部電源供給の見込みはまだたたないと免震棟の緊急対策室より連絡です」

「わかってる！」

21時21分。

「バッテリー、つながりました。燃料域水位計Aで水位データとれます。プラス30センチです」

21時51分。

「1号炉炉内圧力計表示上昇中です」

「報告します。1号炉、計器表示が圧力上昇トレンドです」

「1号炉の建屋内、10秒で0.8ミリシーベルト、入域禁止レベルです」

「社長命令で原子炉建屋内入域禁止が決定されました」

「電源は！ 電源はまだですか！」

「米軍の発電車が来ます」

「本当か？ 確認したか？」

薄暗い中、1号炉のチームは必死だった。

「非常用復水器が停止してます！」

「再起動しろ！」

「やってます！」

みな怒鳴り声になった。

「多分燃料棒の合金と熱と水の作用で水素ガスが出ている。

そのガスに引火したら、すべてが」

発電所長と本店は同じだった。

「ベント弁から建屋内のガスを放出する」

「大気中にですか?! ガスには放射能が含まれていますよ！」

「そんなこと知ってるさ。でも水素ガスに引火したら、炉が壊れるかもしれん」

「炉は爆弾満載の戦闘攻撃機が突っ込んでも壊れないはずでは」

「だったら9.11でなぜツインタワーが崩れたんだ? すぐにガス放出開始。急げ！」

あとで連中に何を言われてもかまわん。

水素爆発を防げ！」

電源を失った発電所内、夜の闇の中、危機が近づくなか、危機回避に皆が必死だ。

3月12日(被災翌日)

「圧力上昇続いています」

「この中央操作室への放射線線量も上昇中です。0.3ミリシーベルトを超えます。間もなくここも」

その先が言えなかった。

「ベント弁、また動きません」

「手動操作しかないうえに放射線が強すぎて現場に10分しかいられないからな。くそ」

ホワイトボードに誰がベント操作に行ったかの表が作られるが、「開操作」と書いた後にバツが並んでいく。

「それにしても字汚いな、お前」

当直長がすこしでも気持ちを紛らせようとして言ったが、それがスベった。

被災翌日の4時3分だった。

1号炉操作チームは、上がっていくデータを見ながら、しかし電源をうしなあってどうにもできなくなっていた。

操作室と炉は、間にいくつもの壁があって隔てられているものの、放射線は種類によっては易々とそれを貫通する。

「何でだよ、俺が頑張っていたわってきた1号が俺を追い出すのか？」

なんだったんだ、畜生」

原子炉のこういう異常事態は、急激に数分では進まないよう設計されているため、異常は数時間にわたって続けて見なくてはならない。

「セキュリティゲート緊急開放、退避路確保」

当直長の本村はそう指示した。

「ここを棄てるんですか」

思わず操作員補が言う。

「俺たちが死んだらだれが始末つけるんだ。もっとひどいぞ。」

ある程度のモニターと操作は免震棟でもできる。その勇気はとっておけ」

当直長はそう言った。

「放射線がさらに上がったら避難する」

それに続けて、彼は口にした。

「畜生！」

ついに放射線警報が鳴った。

「退避する」

持ち出す資料を持って、当直長を最後に退避する。

「当直長？」

副長が振り返った。

「運命をともに、じゃないですよ！」

「わかってるさ」

彼は、そう言いながら、顔がゆがんでいた。

「何もできない。

しかも、これからあとは、どうあっても地獄だ」

そう言うと、彼は言った。

「また戻ってくる、といたいだが」

副長は、首を振った。

夜が明けた。

「よりによって、せっかく封じ込めてたガスを放出するのか」

一人が嘆いた。

「ガスを封じ込めても電源がない炉は熱がたまって、溶けながらいずれ封じ込めを破る。

爆発するよりはましだ」

そう言いながら屋根のベント弁を手動で開ける作業を指揮している。

「もう溶けてるだろ」

「正直に言えばそうだ。昨日の18時には水位計があてにならなくなってたからな。それから冷却系喪失のままもう14時間もたってる。常識で言えば溶けてる。でも、それを言えないのが今の世の中だ。

正直者は叩きに叩かれ吊るされる。だから例の増殖炉でも首吊ったやつがいる。

おれも首吊りたくなる。ここまでだと。だがそれはしない。おれがどうなっても、この炉を放ったらかしにはできない。

周りに人の暮らしがいっぱいあるんだ。自分だけ逃げるわけにはいかない」

「圧縮空気による操作系もやられている」

「だって免震棟の二階まで浸水しかかったんだ。当然だろう。

直すのさ。壊れても壊れても直して直すのが俺たちの仕事だ」

「しかし防護服はきついな。改良されても日が照ると蒸れそうになる」

「蒸れなくても、息がしにくい。気のせいかも知れないが」

「くそ、放射線が高過ぎる。長く操作できない上にバルブまでこの扉から遠すぎる」

「もう1系統あるとか、ロボットでやるとか出来ればいいのにな」

「系統は全滅だ。ロボットは原子炉災害用っていうだけでギャンギャン批判される。原子炉は安全なはずじゃないのかって。

誰がその安全守ってるんだ。人が守っているんだ。その人間を踏みつけにして何が安全神話か。ちくしょう」

そのとき、ヘリコプターが遠くを飛ぶ音が聞こえた。

「あれに総理が乗っているらしい」

彼は、言った。

「知るか。

もうこれで日本の原子力は終わりだ。

何もかも全部。ちくしょう」

捨て鉢になりながら、彼は作業を続ける。

「1000年に一度の津波に対応しなきゃいけなかったんだな。

俺たちの努力って、いったい何だったんだ。

本店は『安全です』を言いながら、ちょっとミスれば処分の嵐に隠蔽ばかり」

「聞いてやるよ。俺も同じ思いだ」

傍らには測定員が放射線を測定している。

免震棟の中では状況の確認が続いていた。

「保全班より。ベント弁開放なかなか終わりません」

「10時に初めて4時間かかっているな」

「ええ。作業は急いでいますが」

「わかってるさ。放射線症になったらまた大叩きだ。絶対に放射線障害患者は出せない。

でもこのままだと、炉ごと吹っ飛ぶぞ」

「いえ、今開いたそうです。外部センサ、放射性セシウムを検知」

「ERSSモニタ、センサーの一部からの応答喪失続いています」

「炉内温度は」

「上昇中です、格納容器圧力も上昇トレンドです」

そのときだった。

「ガス濃度急上昇！」

皆に戦慄が走った。

「急上昇？ ベント弁をあけたのに？ 何故だ！」

「なんてこった！」

「1号炉総員退避！ 急げ」

そのとき、この3階建ての免震棟が震えるほどの大きな爆発音が響いた。

ああ、なんてことだ！

ついにやられた！

「損害知らせ！」

「負傷者、被爆者多数！」

「消火班救護班急げ！」

「炉温度は！」

「なおも上昇中！」

「救護状況は？」

所内救急車が負傷者を收容する。

爆発した1号炉の建屋は骨組みだけになっている。

「雨よけのスレート張りとはいえ、あの壁をあんなに吹き飛ばすなんて、人間が食らったら」

收容された軽傷者の一人が吐いている。

「大丈夫か！」

皆が解った。

放射線障害だ！

「大丈夫だ、放医研を信じろ」

「わかっています。でも、くそ、畜生！」

彼はまた吐きながら悔しがった。

俺もああなるのかな、というような後輩のその不安を見た保全主任が肩をつかんだ。

「治る。まだ確率は低い」

「でも、いくら確率の低いくじでも、当たりくじ引いたらどうするんですか」

「ああ。そうだ」

主任は言った。

「これが、俺たちの仕事だ。

だから防護服も、防護マスクもある。

ちゃんと自分の身を守れ。

正しく怖がるんだ」

そこに当直長が言い切った。

「でさ、俺、そのくじ引くよ。悪いけどみんなの分まで」

皆、振り返った。

「悪いけど、みんなの分の当たりくじは、俺が独り占めする」

「そんなことできるわけが」

「俺は未来のために死んでも良いと思う。

だが、死ぬのは、断る。

俺は死なないし、屈服もしない。

だから、みんな、防護服をしっかりと身につけてくれ」

皆がそのタフさに、憔悴し疲れ切った顔でうなずいた。

「消防のハイパーレスキューがここに来る前に足止めくらってます。

爆発が影響しているようです」

「そうか」

所長はかみしめた。

爆発は、完全な敗北だ。

それをみな、つきつけられたのだ。

そのとき、本店からの指示が届いた。

「1号炉に、海水を注入する。

海水注入系確認」

皆がその意味を知っていた。

真水で運転するプラントに海水を注入するのは、冷却を優先して再利用をほぼあきらめた策だ

。

「確認しました」

「注入しろ」

所長が命令した。

そこに1号機の当直長とチームと、そのグループ皆がいた。

皆、黙って泣いていた。

「まだだ。冷温停止、そしてその先はおそらく廃炉だ。

戦いはここまで続く。

ほかの2号3号4号もまだ心配だ」

皆がうなずきながら、それぞれこのERSSモニタに戻った。

「おい、本村、お前を所長付きにする」

「処分ですか」

「おいおい、本社みたいな馬鹿なこと言うなよ」

みんな、苦笑した。

「お前が一番タフだ。お前にここのケアと本店とのやりとりを頼む。

一番難しいが、お前が適任だ。

正式な辞令も判子もないが、お前に頼む」

「わかりました。

ちょうど自分の炉のこんな始末で悔しさと奥歯が潰れそうでした」

「その分頑張ってくれ」

「承知！」

そんな中、また揺れが始まった。

「余震です！」

「注入中断！」

「どうした！」

「ポンプ故障発生！」

「修復急げ！」

まだまだ戦いが続いていた。

「本店へ。こちら免震重要棟」

「本店担当、って、おい、本村じゃないか！」

「中居さん！」

「懐かしいな！ お前そこにいるのか！」

「ええ。中居さんが本社担当なんですか」

「ああ。しかしよりによってお前か。お前、俺と組んでいたとき、すごく強情で難儀したよな」

「すみません」

「でもいい。同じ運転チームだった。俺が当直長の時、お前が操作員だった。そのお前が当直長か。時代だな。

まず頑張ろう！」

「はい！」

「怖い」

本村がトイレにいこうとすると、社員の女の子が免震棟の廊下で震えていた。

「君、逃げなかったのか！」

「事務本館にいたんですが、こっちの準備をしてたら津波がきて、足がすくんで」

「そうか」

「なんか、数字が何倍何倍って。

私も死ぬんですか」

「ああ。このままなにもしなければな」

彼女は涙を浮かべた。

「だから、自分で自分の身を守れ。

ちゃんと守れば、自分も仲間も守れるんだ。

まず数字をちゃんと読む。

相手は放射能、放射性物質の粒子だ。

センサーに一つでも当たれば数字は跳ね上がるが、当たらなければ数字がきちんとでない。それでも粒子は空気や地面や床にあって、危険になっている。

だから、数字を見たら、その変化を見るんだ。

増え続けるか、減っていくか。

それをトレンドと呼ぶ。

そのトレンドで判断するんだ。

その時その時の数字で一喜一憂してたら、身を心も守れない。

そこで、防護服は有効だ。ちゃんと着ること。

この免震棟も遮蔽がある。防護服や遮蔽壁はちゃんと機能する。

ちゃんと計測員と行動して、遮蔽と防護服をしっかりやれば、大丈夫だ。

ただ、ここの壁はもうちょっと遮蔽の厚みがほしいんだが」

彼女は顔を上げた。

「会議で『使えるようにしておけばいい』と言われて予算削られるところだった。

もちろんなんだそれはという話でもめた。お金は有限だから、みんなそこは工夫している。

そういえば君、広報に配属されてたね」

「はい。すいません、思えば研修でそう習ったんですが、これで頭が真っ白になって」

「普通はそうなるさ。習っただけじゃだめだ」

本村は肩をたたこうとしたが、やめた。

「セクハラは駄目だったな」

彼女の顔に、ようやく赤みがさした。

「さあ、折を見て避難するんだ。俺達が頑張るから」

3月13日(3日目)

3日目に日付が変わった。

「状況は？」

「所内の多くの計測点で放射線を検出しています。

1号の排気と爆発後の汚染がそのまま広がっていて、作業は防護服必須です。

この免震棟以外は放射能まみれです。

炉への注入は再開していますが、熱が上昇トレンドのままです」

「海水これだけ注入してもか」

「ええ。それに瓦礫が多くて防護車両がうまく入れません。

特に2号3号の周辺がひどく、またこの2機のモニタ情報が少なすぎます」

「除去作業車は？」

「線量が多くて無理です。

接近も難しく、手作業が限界です」

「作業車が何故？」

「このまま無理して使い過ぎれば作業車そのものが危険な汚染物になります。

しかし4号は今のところ落ち着いています」

「5号6号は？」

「離れていますし電源も生きています。モニタでは異常はありません」

所長がみなを見た。

「みんな、案外タフだな」

「でももう、内心では完全にみんなテンパってます」

「まだみんな緊急状態だ。本来は何人か無理矢理眠らせて交代要員を確保したいが」

「無理です。手一杯です」

「訓練通りには行かない、か」

「ええ。でも訓練は無駄ではありません。当たり前ですが」

「そうだな。そうしたい」

そのときだった。

「3号機高圧注水系停止！」

「おそらく燃料が露出してます！」

「くそ、3号まで！」

「注水不能！」

「蒸気排出！」

「3号も放射線量上昇中です！」

3号が今度の危機だ。

「1号の水位計喪失」

「1号に注意！ 3号に真水注入」

「3号、入っていきません！ 格納容器圧力上昇中！

このままでは容器が破れます！」

「3号、格納容器内排気！」

「ホウ酸注入！」

「燃料露出！」

「くそ、海水注入！」

「1号の水位推定。1号水位変化なし。3号、注入にかかわらず水位変化なし！」

皆がパネルを見守る。

「1号、3号ともに燃料が露出しています！」

最悪の最悪だ！

「もっと注水するんだ！」

3月14日(4日目)

日付が4日目になった。

「注水用海水タンク、空になりました！」

「なんだって！」

「1号・3号注水停止、停止してます！」

「3号冷却喪失！」

「ガスが出ます！」

「3号作業チーム、退避！ 退避しろ！」

また爆発が起きた。

4日目、3月14日11:01の事だった。

「救護班急げ！」

「損害知らせ！」

「負傷者11名、うち1名被曝！」

「20km圏内屋内退避が発表されました」

「米空母が退避していきます」

「あいつらも自分可愛いんだ」

「いや、それは半分そうで半分は違う」

本村が否定した。

「溺れてるやつを助けるやつは、自分が絶対に溺れないように固めてから助けるんだ。

考えても見ろ、ここだけじゃなくてあの原子力空母まで『逝った』らどうなる？

あいつらも同じように、自分が少しでも放射性物質を漏らしていないかで炉の状態の悪い兆候を見逃さないようにして炉のお守りしているんだ。

連中も戦ってるんだ。自分の炉を安全にできなければ、救助ができない」

「失礼しました」

「そうだろ」

その時だった。

「2号機が！！」

「どうした」

「2号機の冷却、喪失してます！」

「なんだと！」

皆がまた跳ねるように対応する。

「水位、低下トレンドです」

「くそ、2号機、おまえもか！」

「2号機注水！」

「冷却手段が」

「もちろん海水注入だ！ 急げ」

「くそ、トレンドはとれているか！」

「2号機、燃料が全露出してます！」

「なぜだ！ 注水中じゃなかったのか！」

「ポンプ、燃料切れです」

「確認してなかったのか！」

「それがモニタ装置も切れてて」

「くそっ！」

「運にも体力にも見放されたな。

ハズレくじの連続だな。

注入再開は」

「まもなくです」

「2号、圧力上昇！」

「2号ベント弁開放！」

3月15日(5日目)

0時を回った。

「地震から今日で何日目？」

「タイムショックじゃないんだからさ。」

5日目だ。

3月15日、火曜日だ」

「朝からの活動のミーティング用のデータやってるけど、センサーがかなり死んでる。

これじゃたまらん」

「悪いトレンドならそれでわかりたいが、それすら取れない」

そして朝になった。

ミーティングが終わろうというときだった。

爆発音が響いた。

「何だ！」

皆が口々にいう。

「わかりません！」

「調べろ！」

「2号機の圧カプールの圧力が」

「どうした？」

「ありません。外気圧と同じです」

本店とやり取りしながら、本村がつぶやいた。

「2号機での爆発だ。」

たぶん穴が開いたな」

「そうだろう。くぞ！」

「普通が普通じゃないのは今に始まったことじゃないとはいえ」

「今後の作業の計画ですが、なんですかこれ」

「書いてあるとおりだ。」

受電準備作業を優先して継続してくれ」

「炉の方はほったらかしですか。瓦礫撤去、中央操作室の回復、炉の制御に他の方法はないんですか」

「まず受電準備が優先だ」

「なんですか」

「見に行こうにも手が無い。君たちにそういう危険はさせられない」

「何言ってるんですか！ もう十分危険ですよ！」

俺たちをなんだと思ってるんですか！

俺達はそんなのとっくに覚悟してますよ！

地獄の釜の底で、くじ引き続ける俺たちをなんだと！

本店がそんなで俺たちに何しろっていうんだよ！」

「落ち着いてくれ。

俺たちはみんな、あれやこれやに叩かれまくった同志だ。

信じてくれ。

冷静に。

今、本当に炉の様子を確認する手段がないんだ。

でも、受電設備を回復すれば、援護を受けながら強行偵察ができる。

犬死には本当に駄目だろ？」

「...ええ」

「心は現場も本店も同じだ。

信じてくれ」

その後、また爆発音が響いた。

みんなが飛びつく。

「なんだ！」

「全然調査が追いつかない！」

「本店は何で助けてくれないんですか！

ERSSは何やっているんですか！

このままじゃ」

「おい、お前」

中居の冷静な言葉に、本村ははっとした。

「同じ当直チームだっただろ？」

つねにチームはひとつだ。

落ち着け。トレンドを見ろ。

俺達もちゃんと調べてる。

同じERSSの画面を見て、同じ情報で判断している。

そしてこっちで分析して、できることはやっている。

だが、センサーがやられているんだ。

あなどるな。もう地獄の釜は開いているんだ。

しかし、それでもだ。

お前とシフトに入って、あけたとき、バルコニーで、俺達作った電気がついている町の夜景を見たよな。

ああ、今日もちゃんと終わった、ってたばこ吸ったよな。

あのたばこのうまさを知ってる仲間だろ」

本村は、息を整えた。

「すいません。余裕、なかったです」

「あたりまえだ。俺たちは人間だ。血の通った人間なんだ。

だから人を助けられるんだ」

その時、報告が入った。

「調査班より。4号機四階で火災のようなものを目撃」

「『ようなもの』じゃないだろ！ 確認したのか」

「いえ、確認手段がありません」

「まずいぞ、あそこには使用済み燃料がある。

しかも炉心と違って手薄だ。

地震で滅多くなっていたら、最悪の場合、放射能の塊が金属燃焼しているかもしれない」

「ガンマ線上昇し始めました」

「たち悪いな、こんどはここもか」

「このままではここも危ないです」

「トレンド監視を続ける」

「何やっているんですか、所長」

「累積線量で、ここから退避する人間をリスト化しているんだ」

「なんか、そのリスト、『デスノート』みたいですね」

「逆だけだな。『生き残りノート』だ」

「でも私はそうは思いませんよ。

みんなを残して自分だけ生き残る方が、一生悔いの残る地獄です」

「4号機での爆発の詳細は」

「不明です。威力偵察も出来ません」

「ガンマ線まだ上がります」

「くそ、これで1号から4号まで4機全部手負いか」

みな、ガンマ線トレンドの計測に注目している。

「しかしこれってすごいよな」

本村が口を開いた。

「あ、公共広告機構のCMの『ありがとうさぎ』？」

「『まほうのことばで、たのしいなかまが、ぽぽぽぽーん』、ってやつか」

「ああ。これを二次創作で『グレートぽぽぽぽーん』ってスーパーロボットにしている。その動画がウェブに上がってる」

「すごいな。作ったやつ、うまいけど、あきれるほど暇なんだな」

「俺たちもそうさ。」

今、朝飯食って、日の出と共に出発して作業して、夕暮れまでにもどってきて夕食。
夜は照明もきびしくて、この事故の収集活動もやりたくてもやれないことが多い。
眠りたくてもこんなじゃ眠れない。

無理して眠るけど、監視中にできることはトレンド計測。

とはいっても長い時間の計測で集中が切れかけ、そこに一番危険な眠気がきかぬない。

結果、こうして無駄話」

「でもそれっていつもだろ？ 緊張しすぎるとミスるからの駄弁り、やってるだろ」

「そうだ。内規では禁止だが、炉の監視はそうだ。

数分で一気に反応しないうちの炉の設計は本当にありがたい。

でも、その間、数値のトレンドを見ながら、普通でも変動する数値のポイントで、良くない想像が頭の中でどんどん高速増殖」

「あるある。でもみんな、それをこらえてる。こうして駄弁って」

「こんなの絶対に公開できないけどな。不真面目、不謹慎！ って厳罰の大合唱」

「ああ。本当にそうだ。

いいよな風力発電の風車屋は。こぼれ話なんて言える。

俺達は何も言えない。言ったら大騒ぎだ。

転職しようかな。『うわっ、私の職場、危険すぎ！』って」

「いや、風車は風車でメンテが大変だ。騒音も大きいし。とても住宅地には作れない。

強風が吹けば一撃で壊れるし、それを避けるためにはフルフェザーしなくちゃいけない。

それと鳥をやたらと引っ掛ける。あれはメンタルのダメージくるよ、マジで」

「そうか。どこも大変だな」

「なんにしろ仕事はそうだ。楽な仕事はない」

「で、トレンドは」

「上昇中です」

「そうか。くそ」

運転が再開された北急電鉄本厚魏駅の案内所に、旅支度をした初老の男性がやってきた。

「あの、ここから新宿まで、電車の運転ありますか？ 新宿まで行くんですが」

「運転はございますよ。少々お時間がかかりますが。申し訳ないです」

「じゃ、切符をお願いします。領収書お願いできますか」

「はい。恐れ入りますが、お名前は」

「では、松芝電気システム社原子力事業部をお願いします」

その名に、駅員皆が顔を一瞬見合わせた。

「お先上がります。お疲れさまでした」

一人の私服に着替えの済んだ明け番の駅員がそう言うと、その旅の男性に声をかけた。

「私も新宿の北急の自分の寮に帰るところなんですよ。ご一緒してもいいでしょうか」

彼はいいですよ、と快諾した。

「本日北急線は運転区間すべてで徐行運転を行っております。お急ぎのお客様には、ご不便と遅れをお詫びいたします」

車掌アナウンスが流れる。自動放送装置のついた新車だが、車掌は肉声で言葉を添える。

「電力マンとして、エンジニアとして、心からすまないです。本当に」

彼は話した。

「実は、あの例の福島原発の最後の改修に携わったんです。

それで、呼集がかかって。

でも、呼集がなくても行くつもりでした。

私にも、責任がある」

彼は続けた。

「でも、あの炉、我々はあの子と呼びますが、本当にあの子には無理をさせました。

生まれが祝福された日本の原子力技術が、今、終わるかもしれませぬ。

東海村の初めての原子炉ができたとき、原子の火が点った、地上の太陽ができた、と皆歡びました。

先の大戦で疲弊し、電力不足で立ち直ろうとしても足を引っ張られる日本にとって、原子力は夢の技術でした。

まさに地上の太陽だったんです。ウラン1グラムは石炭2.2トン、石油1.3トンに匹敵します。

皆の期待を受けて、原子力工学への投資が進み、炉の改良も進みます。日本でも原子力船（くむつ）が進水し、まさに原子力の時代が始まります。

しかし当時は冷戦のなかです。核戦争のための核実験も、今では信じられないようなひどい状態で行われました。そのなかで、放射線や放射能被害をうけた被曝者の問題が生まれます。

日本は被爆国です。ですから日本には広島と長崎に赤十字社原爆病院があります。そのなかで核の被害の研究も進んでいます。

そしてマグロ漁船第五福竜丸がアメリカの核実験の「死の灰」を浴び、多くの被爆者が生まれました。彼らの被害もあり、日本では放射能への恐怖が広がります。

原子力船〈むつ〉の放射能漏れでは、事故の発表が遅れて、その恐怖に原子力への不信感が繋がってしまいました。

そこからはもう、悪くなる一方です。どんなに我々が安全な炉を目指して努力しても、技術が進んでも、人間の、人間関係のミスですべてが台無しです。地震などで安全に炉を停止させても、連絡が遅れた、との苦情が来ます。それがなんどもです。

我々工学の人間の説明も悪かったと思います。確率論での話をして、確率は低くても当たる人間がいる宝くじの論理を持ち込まれれば相殺されます。当然です。

必要なのは、信頼の回復しかないんです。そして、人間のミスを最小限にするためには、人間が常に間違える可能性を考え、自動的に安全になる技術と、間違えにくい技術を作るしかない。

私たちはそのために研究開発を進め、また運転員も錬成を続けてきました。

でも、政治もマスコミもそういう地道な努力を評価することはありません。

無謬主義と不信のあいだに何があるというのでしょうか。それはタブーです。

そして原発関係者への中傷や風評被害が常に存在しました。

我々は安全を目指し、電力不足を回避することを目指しました。

いつのまにか停電も珍しくなりました。でもだれもそれを評価しません。電気は当たり前のものになりましたが、それを誰も褒めてはくれませんでした。

そしてスリーマイル事故、チェルノブイリ事故で、不信感はますます高まりました。

それでも日本のみんなのため、炉を作るしかありません。

水力は美しい峡谷と村や町をを沈め、火力は排ガスを出します。無害なガスしか出さないように工夫しますが、それでも足りません。第一、電池のように「電力」を貯める技術は全くないのです。苦肉の策でダムを二つ使って水の位置エネルギーに電力を変えて貯める揚水発電を作りましたが、それも芳しくありません。

グリーン電力も生まれました。家で発電できるようにもなりました。太陽電池、風力発電、地熱発電。しかし現在の産業では、電気の「質」まで問われます。風力は突風が吹けば故障します。風力発電に適した、穏やかな風が吹き続ける場所はないのです。地熱発電も、深い井戸を掘るコスト、温泉を枯れさせるリスクもあり、適した土地を見つけてもそれが国立公園に近いかななかで、国立公園法の制限で建設できないケースも多い。

太陽電池は天候にも立地条件にも左右され、パネルの温度による効率低下もあり、そしてその電池は永遠には使えない上に、その廃棄のことはほとんど考えられていません。

結局、安定供給するには原子力しかない。だから、私も含めて、信じていないくせに原発の電力に頼ることになります。

そして、その不信感で、原発は迷惑施設と呼ばれ、どこにもつくりようがなくなります。

そのうえ、つくってきた炉の寿命も迫り、廃炉の検討とその技術開発が進みますが、しかしそれも多くの人が真剣に、切実に考えません。

核エネルギーサイクルも高速増殖炉は我々の現状の技術がまだまだ不足ですし、燃料の再処理

で使った核廃棄物の処理も出来ません。

そんなどんづまりで、あの子、福島の子供たちを更新します。一箇所に集中させるなどと言っても、他のところは迷惑施設と拒否します。

1967年に着工した1号機は、71年に運転を開始しました。実に40年も働きました。もう十分働いたんです。廃炉としてリタイアさせ、別に新しくてもっと安全で出力も高い炉を作ることは分かっていたんです。でも、それはできません。大きな反発を受けるからです。たった46万キロワットの炉を、なんども改良して使い続けていたんです。

あそこには、7号・8号機を計画中でした。改良型沸騰水型、出力は1機で138万キロワット。実に3倍の出力で、インターナルポンプや非常用炉心冷却装置を使い、またさまざまなデジタル技術による改善をします。既に柏崎刈羽、浜岡、志賀にはすでにそれが稼働中です。

でも、その古い炉を、使い続けます。廃炉にすることが法的にも政治的にも無理だからです。

それを受け入れてくれたあの原発地域の人々は、原発で発電した電力を使えないのです。

東京と首都圏のために、彼らはこらえてくれていたのです」

彼は熱く話した。

「その彼らを危険にさらすかもしれない。本当に悔しいです。地震に耐え、津波に洗われても耐え、停止しても、それでも問題が起きました。

率直に申し訳ない。本当にそう思います。

謝っても謝りきれません。

この事故は、ぜったいに収めます」

駅員は、そう胸を打たれた後、言った。

「どうかご無事で」

すると彼は笑った。

「なんですか。無事に帰ってきますよ。当然です。

あの子のことは私もよく知っています。

ほかにも熟知したプロがあつまります。

そして、ちゃんとあの災禍の中、炉を止めた若い運転員たちも、プロです。

まだ現時点ではわからない不確定要素はあります。

でも、それを一つ一つ確定していけば、自ずと対策の方針が定まります。

想定外のことは、別に原発に限ったことではない。

人間はもともと、想定外のことで、戦う宿命を持っているんです。

ちゃんとあの子を、しっかり落ち着けて、帰ってきますよ」

「東京は大丈夫ですよ」

「ええ。私が知っている範囲内でも、十分無事です。想定外のことがさらに起きれば、想定外になるでしょう。でも、ほとんどは想定内です」

その時、電車の中で新聞を読んでいる人がいた。

そこには放射能と見出しが書かれている。

「放射線と放射能と放射性物質のちがいきちんと説明しないマスコミ。

『ミリ・マイクロシーベルト毎時』の意味も知らせない。

放射線を浴び続けると、人間の体に悪影響が出ます。

しかし、それは『続けると』、です。

だから、『一時間あたりの量』の尺度で言うんです。

そして、その量で計算し、センサーとタイマーをつけて原子力の作業をし、量を越える前に我々は作業を交代し、退避します。

そうすることで、放射線の影響は、人間の体の力で自然に回復できるんです。

それは広島と長崎で日本人がうけた被害の調査でも明らかです。

CTスキャンと比べて、などといいますが、被曝の害を、毎時シーベルトの1時間というと、CTスキャンに1時間入り続けるのと同じことなんです。

別にあの事故現場で寝泊まりするわけじゃないんですよ。

炉も冷却しなくちゃいけません、頭の冷却も必要です」

彼は微笑んだ。

「内部被曝と言っても、我々はマスクもつけ、防護衣も着て作業します。

本当に小さな塵でも、放射性物質は放射線を出します。

しかし、その塵に東京が負けるのなら、なぜあのダダ漏れに死の灰を降らせた原爆実験を行っても、東京の人々は無事だったのか。

広島と長崎などは直撃です。それでも人は住んでいて、樹も生え、実を結び、子どもが生まれています。内部被曝と生体濃縮があるのなら、彼らは何故今生きているのでしょうか。

広島のおいしいお好み焼きを作っているあの平和は、どうして訪れたのでしょうか。

むしろ、そういう常識の歪みの被害のほうがよほど深刻です。

でも広島の人たちと、日本の他の地域の人達は、普通に結婚しています。子供も生んでいます。

常識の出番です。自然界にも放射線や放射能はあります。人類はそれに屈しない力を、自らの体の中に既に持っているんです。

そして、自然界はもっと強いそれを持っています」

彼がそういうころ、電車が新宿が近づいたアナウンスが聞こえた。

彼を駅員は見送ることにした。

「なんか死亡フラグたてられちゃうよなあ」と彼は笑っていた。

「普通に帰ってきますよ。仕事して。それだけです」

そして、東電の迎いのバスがいた。

「じゃあ、帰りは」

駅員は名刺を渡した。

「帰ってくる時、ここにご連絡を。」

お仕事の帰りのロマンスカー、一番いい席をおとりしますから」
彼は『前展望がいいですね。後展望は酔っちゃいますから』と笑った。
「当然、取っておきの前展望-1のお席を用意します」
彼は笑った。
そして、彼を載せて、バスは出発していった。

計画停電が始まるが、東京23区内は停電を回避することとなった。
しかし、その外では停電する地域があった。
夜がやってきた。
街をゆく皆が、一様に疲れた表情をしていた。

その時、突然ギターを取り出し、歌い出す男達がいた。
その演奏に、みな驚き、そして馴染んだメロディーに、みな顔を緩めた。

さよならは言っちゃいけない またあえるから
僕らは皆 この街で戦う仲間
君がたとえいなくなっても 僕らは守り続ける この街を
またあおう きっと会える 僕らは同じひとつの道の上にいる

去年のMHK紅白歌合戦に出演したバンド、「トレンチタウン」だったのだ。

演奏が終わり、拍手が湧いた。
ゲリラライブの通報で駆けつけた警官ですら、拍手していた。

決断

「ガンマ線、トレンド計測ではあと1時間で規定値を超えます」

「わかった」

所長が決断した。

「退避する。退避準備開始」

「ここを放棄するんですか」

「いや、最小限は残さないといけない。

所長と運転支援部で退避する者を決めた。

俺も残る。

そして累積線量の高いものは後退させる。

家族のいるものもだ。

そしてその次は年齢の若い者」

「俺は残ります！」

「おまえはパパになったばかりだろ」

「『パパの力』で終わらせるんですよ、こんな地獄。

息子らにこのままのここを残すわけにはいかない」

「大丈夫、みんなもどってくる。絶対に」

免震重要棟に57名を残して、その夜はみな退避した。

3月15日、5日目の夜だった。

「みんな、ありがとう」

「迷惑かけて全員でトンヅラはできませんよ」

「とはいえ、俺達は英雄じゃない。ただ、自分の後始末はしたい」

「ああ。出来ないやつがさんざんいるがな」

彼が、あいつとか、あいつとか、と言うのに、皆笑った。

「迷惑施設で、老朽化もダメ、退役もダメ、出るゴミも処分はダメ。

結果たんまりこの発電所に集めてるけど、みんな決断しない。

『連中』のせいもあるが、それだけじゃない。

意思決定の先送りが過ぎる。

その上で無謬と厳罰だ。これじゃよくなるわけがない」

本村はその時、言った。

「おい、歌おう。なんか歌ないか」

「趣味はどうあれ、こんなのがあります」

「おお、勇ましいな。ドイツ語か」

「Wenn alle untreu werden、すべてが裏切ろうとも、です」

「そうだ、歌おう！」

「でもナチスの歌でしょう？」

「もともとは元々は民謡の勇気の歌です。それをナチスが勝手に利用したんです」

「民謡を勝手に利用、か」

「何でも利用だな」

「なりふり構わずやる時だってある。人類はそんなに選択肢あるほど偉くない」

「そうだな。歌い方教えてくれ」

「じゃあ、私に続けてください」

「結構難しいな」

「練習ですよ、何事も」

57人の合唱が、響いた。

3月16日(6日目)

夜が明けた。

3月16日、6日目だ。

「増援来ました！ 自衛隊とメーカーの大部隊です！」

重要免震棟の中に声が響いた。

「なんですかその大荷物」

「鉛のシートだ。たくさん持ってきたぞ。

この重要免震棟の遮蔽を強化し、強力な要塞にする。

炉が難攻不落の城だったら、こっちも『一夜城』を作って対抗だ」

「なるほど、さすが自衛隊が出るわけだ」

「180人か。一気にこの免震棟が狭くなるな」

「一部人員を交代します」

「3号機、白煙が上がっています」

「4号機の4階の火事、またです」

「またかよ」

「ええ。またです」

「くそ、確認したくても放射線が強いし足場が悪い」

「3号、水蒸気放出」

「人数は足りる。ここでチームの分担をはっきりさせよう。

それと、ミーティングの後の一本締め、あれがいい。

一本締めはこれからみんなでもやろう。

心をひとつにするときだ。とっくに一つだったが、確認するのはいいことだ。

とにかく、水蒸気爆発だけは防ごう。

目下の最悪は、この汚染が水蒸気爆発で完全に炉ごと吹っ飛ぶことだ。

チェルノブイリはそれが起きた。

あっちは1基、こっちは4基一斉だが、最悪をざっくり考えれば同じぐらいと覚悟する。

現状から悪くなる方向、減点法で考えるからキツイんだ。

逆にマイナス点、最悪の点を置いて、そこからどれだけマシかで考えるんだ。

起きたことは『こぼれたミルク』だから仕方がない。本当に謝罪どころの話じゃないが、それは今はどうにもできない。

だが、少しでもその起きたことを収めるためには、そう考えるんだ。

気持ちを折るな」

テレビが流れている。

「記者会見で出てくる官房長官が『日本のジャック・バウアー』だってさ」

「ドラマ『24』の主人公？ 眠らなきゃみんなジャック・バウアーか？」

「それだったら俺たちみんなだ」

「でも、本村はそれだよな」

皆が向くと、黙って作業をしていた本村はいった。

「こんな背の低いジャック・バウアーがいるわけないだろ。

まず、作業を頑張ろう。

戦争に英雄は要らない。どの戦争も屈服しない兵隊が主役だ」

皆が給電回復の作業に奮闘する。

鉄塔に登り、電線をつなぐ作業を、防護服を着て、分厚い手袋で行う。

プロの中でもさらに熟練技能者だけが出来る仕事だ。

決して日雇いとされる人々のできるものではない。

しかし、彼らの技能をもってしても疲労は容赦なく累積する。

敵は半減期はあっても疲労は知らない放射性物質だ。

その時だった。

免震棟の一斉にモニタ表示がエラー表示に切り替わった。

「何だ！」

「本社との通信途絶！」

「ラインが切れた？」

「いや、切ってしまったらしい」

「修復は」

「この暗さでは無理です」

「また疲れのミスか」

「だれだってもうみんな限界超えてる。

炉には対抗策がなくなりかけて、疲労もすさまじい。

放射能がこんなに怖いとは、知っていてもここまでは思わなかった。

知っているはずだったのに、本当にこう汚染が広がっていると、露骨に精神的なダメージが来る。

本当に骨身にこんなにしみる」

「残った衛星電話で連絡しています」

「上空の飛行規制がかかりました」

「保安院、オフサイトセンターを福島県庁に移動。

ここから80キロへ後退です」

「保安院の連中、逃げたのか？」

「情報能力がオフサイトセンターでは不足するとのことですよ。

自治体との対応連絡が手一杯だそうです」

「自治体が情報不足で」

「俺達も情報不足だ！」

「そう言うな。彼らも必死だ」

本社でも対応に追われていた。

「くそ、通信回復はまだか」

「我々のほかに数値が信頼されていません。自治体が情報をくれと矢の催促です」

「隠蔽しているんじゃないか、って」

「隠蔽したくたって、情報が足りないんだ！」

「でも、確実なものもあります。その情報をちゃんと発表してますか？」

「いや、その重要度を慎重に判断してからということだ」

中居は顔色を変えた。

「だからもうそういうのはやめてくださいって言っているじゃないですか！

風評被害がとんでもなくなりますよ！

なぜちゃんと説明しないんですか！」

「できる奴がいないんだ。

第一、このテレビの説明を見てたら、俺も頭がおかしくなる」

息を吐く。

「こんな説明じゃ、分かっているやつでも混乱する。

学者共が雁首並べて何も説明できない。

これじゃ予算切られるのがあたりまえだ」

「とりあえず、あの記者会見を改善してください。

あんな言質取りと罵声のなかじゃ、まともに人々に情報が伝えられません！」

「そうだな。でもなかなか」

「現場は今、我々と通信出来ていないんです。

彼らを孤立させて何やっているんですか！」

この6日目の夜、奇妙な静寂が訪れていた。

「本店って、案外頼りになってたな」

本村は口を開いた。

「保安院も。今思えば、みんな見えない敵と戦ってきた」

「また癒着だの利権だの原発マフィアだの何だの言われるだろうがな」

「そうだろうな」

「もう、これで俺、十分だよ。

ただな、俺だけ狙って殺してほしい。

ほかのみんなを巻き込んだらただじゃ置かない。

これまで支えてくれた周りの街や村は絶対に守りたい」

「俺も。そして、絶対に巻き込ませない。

ただ、正直」

口が一瞬止まった。

「もうだめかもしれん」

「悔しいです。

死ぬのは怖くない。

でも、こんなに迷惑をかけっぱなしで死ぬなんて」

「いや。大丈夫だ。

まだ死ねないって。

みんなまだ仕事もあるし、死ぬにはまだみんな煩悩ありすぎだよ。

地獄の入口でちゃんと規制されるさ。

みんな煩悩が『暫定基準値』超えてるから。

だからそれまでしっかりやるんだ」

「でも、やる気の糸も切れかけです」

「お前の糸は一本じゃないさ。

一本切れたぐらいだったら、まだ大丈夫だ」

しかし、皆、また少しずつ言葉がなくなってきた。

まずいな、と本村は思う。

疲労が体以上に精神に来ている。

3月17日(7日目)

7日目に日付が変わる頃だった。

夜の闇の中、自衛隊のヘリ前進基地の指揮所で、陸自のヘリ飛行隊長が叫んでいた。

「上空からの放水をやらせてください！」

「駄目だ、上空は飛行禁止だ。

放射線は容赦なく上空にも届く。

その上効果があまりにも疑問だ。

二階から目薬とはこのことだ。

政治家が思いつきで言っているが、それをやるのか？

「明らかな愚策だぞ」

「しかし、このままでは士気が下がり過ぎます。

このままだと一気に戦線が崩れます。

放射能でみな、体力がまだ残っていても心がボロボロです。

そのくせ相手の炉は半減期はあっても疲れを知らない敵です」

「とはいえ」

「おねがいします！」

「そうか」

連隊長は考え込んだ。

「そうだな。よし、あちこちに頭を下げてみる。

幸いうち、自衛隊の統合本部にも同期がいる。うちの統合長も先輩だ」

そして、結論が出た。

「許可が降りた」

「本当ですか！」

「ああ。飛んでくれ」

私もくじを引く。俺、運強いんだ。この前の宝くじもあたったし」

「え、それ、かくしてたんですか！」

「しまった、ばれた！」

連隊長にみんなが笑った。

「ああ、わかった、これが終わったらたっぷりおごってやる。

その前に。

術科競技の技、見せてやれ。

阪神淡路大震災の時は出来なかったが、今回は違う。

やると決まった以上、二階からの目薬を、しっかりガッツリさしてやれ！」

「はい！」

夜が明けた。

ヘリが離陸した。

海の上でホバリングし、海水を機体から吊るしたバケットに取り込む。

そして上昇し、炉に向かう。

「線量を計測してくれ」

「やっています」

「目標視認。線量は」

「結構来てますが、いけそうです」

「よし、一回の通過で決めるぞ。タイミングとってくれ」

「了解、用意よし」

ヘリが進んでいく。

あれが免震棟だ。

そして、炉の建屋が大きくなって見える。

「放水用意、もうすぐ...もうすぐ、テェッ！」

「自衛隊がヘリから放水しています！」

「焼け石に水だ。

だが、その水が、ありがたい。

同じくじを引いてくれてる仲間がいるんだ。

それに、水蒸気爆発が起きなかった」

「まさか。それは」

「そうだよ。放水が有効で、リスクが少ないってことだ」

本村が目を光らせる。

「これで冷却手段が見つかった。

反撃できるぞ！」

「ヘリ情報！ 燃料プールに水が残っているようです」

「『ようだ』？ 不確実すぎだ」

「本店と通信回復」

「通信システムのチェック、リンク復旧確認」

画面が戻った。

「本村！ 元気だったか！」

「ええ。ムカつくぐらい元気ですよ！」

二人は笑った。

「とりあえず、食事改善できませんか」

「分かっているだろう？ そこは煮炊きが出来ない。外気と遮断した気密になっている。だからレトルトカレーとマジックライスとビスケットだ」

「でも正直、一生分のレトルトカレー食べた気になってますよ」

「そうだよな。わかった、なんとか調達部にもうちょっといいものを持っていけないか調べさせる」

「お願いします、食事は戦いの基本です」

「そうだな。それと、機動隊の放水車がそっちにつく。続いて消防も行く」

「放水作戦ですね」

「ああ。水蒸気爆発が起きないか、確認しながらだ。彼らの誘導を頼む」

「そうですね」

3月18日(8日目)

「増援です！ 増援がさらに来ました！」
「ご苦労様です。消防の『スーパーレスキュー』です。
到着が遅れて申し訳ありません。
しかし、ここに来るときに十分覚悟しました。
みなさんと運命をともにします。
そして、必ず帰ります。
消防魂と共に、ここにきました！」

「ここまできたら、本格的なチーム編成がいるな。
本村、お前に任せてチーム編成を支援部とやる。
きついか」

「正直」

「だろうな、だが、お前はほんとすごいよ。
お前も原子力で駆動してるみたいだ」

「結構内心はやばいですけどね。
今は鉄腕アトムもドラえもんもいつの間にか原子力駆動じゃなくなりました。
原作はそうだったんですが」

「本当か？」

「悲しいですが、つまりはそういうことです」

「放水車、放水開始」

「消防車が加わります」

「さすが大型航空機事故用の放水車はすごいな。

うちの自衛消防なんかミニカー以下だ」

「もっと呼んでいきますから、次々と揃うはずです」

「屈折放水車も来るそうです」

「こういう時じゃなきゃ、写真撮りたいよな」

「お前特殊車両マニアだもんな」

「うちも買いましょうよ、あれ」

「ああ。買っておこうな」

「3号に外部電源接続」

「センサーを回復させろ」

3月20日(10日目)

「3号センサー回復。3号温度高いです」

「注水強化！」

「圧力、なおも上昇トレンドです！」

「くそ、またも負けパターン突入か」

「繰り返すものか！」

「ERSSと同じ手が打ててます」

「仕事してくれ、ERSS」

皆がトレンドグラフに注目する。

「安定してきました。

安定トレンドです。

弁は開けなくて大丈夫です」

「やった！」

「ようやくERSSが仕事したな」

「ああ」

「いい傾向だ。ここまでの全部危ない方向へ向いていたトレンドが、ようやく安全側に少し向いた」

「2号通電しました！

注水開始！」

「74式戦車がくるんですか？」

「ああ。あれには核戦争に対応した装備がある。

遮蔽もフィルターも核戦争対応だ。

あれにドーザーをつけて、2号3号の周りの瓦礫を排除する。

そうすれば作業車両が近づきやすくなる。やりやすくなるぞ」

駒門駐屯地の2両を使う。もうその準備は整ったらしい」

「ところで」

免震棟の休憩室に本村が出た時だった。

「これからどうなるだろう」

「ぶっちゃけ、早々に初芝電気システムがレポを出していた。

結局、最悪の場合は石棺を作って廃炉だろう。

もちろん、そのためには冷却回復が大事だ。

でも、それが上手くいかなければ、砂袋に鉛と砂を詰めたのをへりから山ほど炉に落として、

とにかく埋めるしかないな。チェルノブイリはそうした」

「なんでそれを今しないんです？」

「どっちみち熱もでれば放射能も出る。

放射線を出す物質は、ヨウ素は8日で半分の強さに減るが、セシウムは30年かかる。ましてプルトニウムは2万年以上だ。

それを垂れ流さないように抑えこむには、少しでもいい方法を探すしかない。

それをいま、本店ががんばっている。

まあ、チェルノブイリはそれで石棺を作った隣の炉は運転を続けたからな。放射性物質の怖さがなんなのか訳が分からなくなる。恐怖と実際のリスクが釣り合っていないのがよく骨身に沁み
たよ」

「でも、それに俺達がこんな」

「おい」

本村はその先を切った。

「大丈夫か。本店だって必死にやっている。

現場が戦場なら、会議室もそういう時は戦場だ。

タバコ吸って待ってる余裕なんかない。

だからCPX、指揮所演習があるだろ」

「そうですけど、内心」

「そうか。なにか飲んで気分転換しろ。

おそらく20年近くはこの近くは立ち入り禁止だろう。

申し訳ないが」

「家族と連絡したんです」

「そうか」

本村は受け止めた。

「無事でしたが、他のみんなも、家族が。

しかも放射線のために捜索活動が進んでいないって」

「そうか」

本村はそう言って、体を折った。

「俺の炉のせいで」

「そんな、当直長は頑張ったじゃないですか」

というと、彼は本村を休憩室から個室におしこんだ。

「あなたが崩れたら」

「ああ。解ってる。

絶対に崩れるわけには行かない。

わかってるさ」

その時、彼がポケットからピルケースを出した。

「市販の強壯剤です。嫁のヒトから、お守り、って。

効きますよ。書類で残業のときはいつもこれでしのいでました」

「そうか。ありがとう」

本村は受け取った。

「わかった。すまないな」

「いいえ」

3月21日(11日目)

「戦車だ！ 戦車が来たぞ」

「まさに戦争だな」

「そんなのとっくにやってるだろ。無人偵察機グローバルホークまで来たんだ」

「5・6号、外部電源切り替え成功！」

「少し楽になった。あの2基は離れてるが、心配だった。

でもこれであいつらまでは逝かないだろう」

「3号で黒煙！」

「線量は」

「変化ありません」

「何が燃えてるんだろう」

「2号でも白煙」

「煙？ なんなんだ！」

「わからん！ 調べろ！」

放水は続いていた。

「4号、外部電源接続成功！」

みな、被曝量制限の中、壊れた施設に突撃し、作業し、そして制限になる前に離脱する。

それをみながチームに分かれて、交代で行う。

「まさに城攻めだな」

彼は天井の吹っ飛んだ原発建屋を外部モニタから見ていた。

「でも相手はゴジラじゃないんです。動き回ったり、よけたりされませんから」

「そりゃそうだ」

みな、限界の中、笑った。

自衛隊、消防、そして東電と初芝などのメーカーでチームが作られている。

施設を回復し、ヘリでホウ酸と海水を落とし、消防車で放水し、さらに無人偵察機やヘリで状況を調べ、また施設にとりついて回復を図る。

医者がみなを身体を気遣う。

「がんばれ。でも、無理はするな」

そのときだった。

「これを乗り切れば日本の原発の実績になる、って言ってるよ、うちの上司」

「ああ、そいつもまた、頭がおかしくなっているんだ。冷却系が動いてないんだ」

「ホウ酸もぶち込んでやりたいな」

みんな、笑った。

苦しいときほど、みな、笑うのだ。

それが一つの発見だった。

「まさか自分が改修した炉を攻めることになると思わなかったが、でも勝手は知っている炉だ。

絶対に落ち着けてやる」

彼は、そのあと続けた。

「そして、帰りはロマンスカーの前展望で凱旋帰宅だ。そう約束した」

「だからそれなんかの死亡フラグみたいですよ」

「いいじゃないか。感動の結末のフラグかもしれないし」

「ああ。どっちもありえるが、でも原子の灯を扱ってきた俺たちの力、甘く見るな、ってことだ

。

失敗はある。まさかあれほどの津波にやられるというのは予想外だった。

悪いことも、想定した悪いことでしかない」

彼は、そういいながらPCでモニタリングのデータを分析している。

3月22日（12日目）

「住民避難完了です」

「22:43、1号から6号全機で受電準備、完了しました！」

歓声が上がった。

「ここから反撃するぞ！」

「ええ！」

3月23日(13日目)

「正門前の放射線、強いです」

「1号センサ復旧」

「1号注水追加」

「水がたまってます」

「SPDEEIの情報、公開されました」

SPEEDIとは、放射性降下物の飛散を予測するシステムで、気象庁のデータとこれまでの事故での飛散例のデータからそれを予測するコンピュータである。

「いまさら、っていうか、これまでそれを公開していなかったんですか！

なにやっているんですか！

テレビに振り回されすぎです！

なんで公開できなかったんですか。

もっと人々を信頼してください！

だから我々は信頼されないんです！」

「それが相互不信の現実だ」

「広報で記者団連れて旅行して、その結果でもやっぱり相互不信じゃないですか！

一体なんのために！」

「広報の旅行にはちゃっかり、『例の連中』も入っているんだ。

何が言いたいか、わかるな」

「くそ」

「そういうことだ。これじゃ誰もまともに問題の検討ができない。

なんにも科学的じゃない。

そのあげくが、このくじびきの論理だ」

「そしてこういう事態に」

「ああ。不条理の地獄だ」

「1号、圧力降下トレンドです」

「そうか。よし」

ついに動き出した。

「1号の中央操作室を、奪回するぞ。奪回のためのチームとフォーメーションを編成する。

夜明けと共にチームごとに援護しあいながら突入だ」

3月24日(14日目)

朝になった。

「行くぞ！」

一本締めの後、チームが配置された。

「いけるか」

「ええ。線量は安定しています」

「よし、奪回する！　いくぞ！」

セキュリティゲートという入り口の瓦礫は人力で撤去されている。

思えばもともと、重要施設として外からのテロリストなどの侵入への備えをしたのがこの原発だった。

まさか、それを自分たちで城攻めすることになるとは。

本村は情報を見ながら、一瞬、それを思った。

「チーム突入します」

瓦礫をどけて、進入口を開ける。

「線量確認！」

「はい！　いけます！」

チームリーダーが入り、ライトで中を照らす。

部屋の中に小さな明かりが付いていた。

天井から蛍光灯が落ちているが、それをよける。

「点けるぞ」

ぱっと光がさした。

ついに明かりがついた。

「1号機中央制御室、照明戻りました！」

「データ読みます！」

「ほかもチェックし、順次奪回作戦だ」

「あっ！」

「どうした！」

「2号機の地下に行ったチームの3名、被爆！」

「くそ！　なにやっているんだ！」

勇気と悔めることは全然違うんだぞ！

救出に他のチームを急行させる！　線量に注意だ！」

「浸水していたそうです！」

「あそこが？　くそ、漏れてたんだな、やっぱり」

被曝した若者3人に、皆が声をかける。

「恐れは何も出来ないが、あなどれば大変なことになる」

「すみません」

彼らは口にした。

「吐き気はないか」

「大丈夫です」

「そうか。でも」

「悔しいです！ 本当に！ あのとき長靴を取りに戻っていれば！」

「ああ、悔しいだろう。だが、戦いは続く。

もうお前たちはここには来られないだろう。

おそらく無事だろうが、それは許されない」

「ええ。ほんと、バカでした」

「いいんだ。気持ちはわかる。ただ、その気持ちが、結果高くついたな」

「放医研の収容準備整いました」

別れを惜しんだ。

「ここが決着したら、またこい。一般見学者として、な。

頑張っ、ここをそうなるようにやっておいてやるから」

彼らは悔しさに泣いていた。

3月26日(16日目)

「今日の作業予定です」

「ミーティング終わり！」

「あの被曝3人、ベータ線熱傷、ほとんどなしとのことですよ」

「本当か」

「はい。治療の必要もないそうです」

「よかった！」

「ただ、辛いだらうな。あいつらはこっちにまた来れないかもしれない。

無傷とはいえ、世論が許さないだらう」

「1号の爆発の時に被曝したあいつは無視か。

どうして正しく怖がることが出来ないんだ、ちくしょう」

本格的な冷却作戦が動き出した。

「4号海水注入」

「2号海水注入」

「1号真水注入に切り替え」

「3号真水注入に切り替え」

奪回作戦のためのチームの活動も続いている。

「外でみんなの様子を見たいが、あいにく放射線のなか、防護服のゴーグル越しじゃ、見れないな」

「施設も大きいですし。無理ですね」

「でも、いけ、いけ、と思ってる。思わず拳に力が入っちゃうよ」

「本当ですね」

「2号機中央制御室、照明戻りました！」

3月27日(17日目)

「3号にコンクリートポンプで注水します」

「さすがコンクリートポンプ、首が長くていいな」

「大規模なコンクリート工事のためだそうです。キリンみたいですね」

「ああ。頼もしいキリンだ。途中の瓦礫を超えてダイレクトで注水できる」

「温度も下がりそうです」

「戦車もがんばって瓦礫撤去してます」

「地上配管引っ掛けて切らないように」

「大丈夫です。彼らもプロですよ。地雷原を回避するつもりで訓練を積んでます。

誘導もしていただいていますし。ヘマはしません」

自衛隊の連絡官が添えた。

「確認班を見つけました。海側のトレンチに水がたまってます」

「復水器の容量が心配です。このままでは冷却水が行き場を失います」

「復水器の水は他のタンクへ移すしかない。準備を」

「トレンチの出口まで、水位差10センチです」

「放水した水と炉の水が流れ込んだら。どっちは分析だが、こりゃ、海に汚染水がもれるぞ」

「いや、正直、もう漏れてるだろう。排水口の数字がこれからえらいことになる。

だが、この国ではホントのコト言うと大騒ぎだ。

これだけやられればこうなる。悔しいが、現実を受け止めるしかない」

「信頼もへったくれもないな」

「注水もこれ以上無理か」

「いや、まだ策はある。ホントのことは、わかるやつに分かってもらうしかない。

でも、本当のことをする人間は、ちゃんと受け止めてくれる」

「そしてこの雑魚寝をマスコミに発表か」

「『英雄が囚人扱い』って、ひどいよな。この外が放射能地獄だってことわかってないよ、まったく」

自衛隊の隊長が口を開いた。

「でも潜水艦に比べればましですよ。私も潜水艦乗りと話を時々しましたが、彼らはこれ並みの状態で数ヶ月過ごします。しかもそれを彼らはその生活を何年も繰り返します。

風呂にも入れず、水も使えず」

「そうなんですか」

「ええ。私たちもあの人らに負けられませんよ」

3月29日(19日目)

「1号に仮設ポンプで淡水注入」

「4号機中央制御室、照明戻りました！」

「これで1号から4号のすべての中央制御室の照明が復旧したのか」

「ただ、照明が戻っただけだ。

とはいえ、喜ぶことはできる。

出口は遠いが、それがみえたんだ」

「でも消防さんは大丈夫ですか」

消防の指揮官が胸をはる。

「何言っているんですか。我々は全国の消防官のうち、特別に選抜され、錬成しています。

腕立て1000回も平気ですよ。本当は日課にもなっているんですが」

「じゃあ、終わったらみんなで腕相撲を」

自衛隊の隊長が笑う。

「ぜひ！ その後はビールで！」

「ええ。それが楽しみです」

「こんな時に社長が入院なんて」

「会長が代わりに出てくるって。

社長も大変だよ。あんな勉強不足の上にただただガラの悪い記者の相手して、ここがドカン
といってからずっと対策室詰めだったって」

「そうか。でも責任ある人だからこそ、計画的に眠って欲しいけどな」

「それが計画停電のこともあるし、経産省や政府が呼びつけて叱責するし」

「倒れるよな、普通」

「でもマスコミはボコボコにしているらしい」

「うちの社長も、ボコボコにされたら、炉が直って停電もしなくなれば、いくらでもされたいだ
ろう。でもそれじゃ解決にならないんだ」

「犯人探して吊るし上げるのが大好きだからな」

「そしてデマ流して、デマを否定したらしまいには『安全デマ』なんていうしな」

その時、本村が切った。

「よし、そこまで無駄口言えるのはいいことだ。頑張ろう」

みな、「ういっす！」と答えた。

3月30日(20日目)

「2号機に注水する。淡水を使う。

4号機にコンクリポンプを回す」

「放水車用のホースが限界です。一部亀裂が入っています」

「そうだろうな。消防活動がここまで続くことはないからな。設計を超えている。

パイプの敷設交換も考えているな」

「はい」

「3号機、線量計振り切れてます」

そして、会長記者会見が始まった。

「廃炉決定か」

「今更」

「でも、東京は計画停電食らっているからな。ぎりぎりまで検討したんだ。

例の連中とか、もっと上の政治の説得とかいろいろあるんだ。

政治の段階が動いているんだ。任せるしかないさ」

「これでうちの会社、潰れるかな」

「さあな。潰れるかもしれん。ただ、今はそれを心配するときじゃない。

それは俺達の仕事じゃないしな」

「復水器の水は玉突き排水でいく。タンクからタンクへ移し替えする」

「それと線量を抑える樹脂の検討が始まった。

飛散粒子が抑えられれば線量は下がる。

そうすればもっと戦力投入ができる」

「それとロボットがくる。火山災害で危険な地で活躍してきた無人重機がいっぱいだ。

これで押さえ込みにかかれる」

「フランスやIAEAも来ます」

「ありがたいが、これも政治の話になってくるな」

4月1日(21日目)

「今年のエイプリルフールは自粛だな」

「何だこのテレビ。おいおい、チェルノブイリの禁止規制、解除されてるだろ。規制されてると言いながらなんで普通のレポーターがそこから映像送ってきているんだよ。明らかにおかしいだろ」

「なんのエイプリルフールだよ。たち悪いな。勘弁してくれ。マスコミさんひどいよ」

「でも、結構街は元気みたいです。二子玉川のショッピングモールオープンとか。人出も結構あるようですよ。上野動物園のパンダもみんな行列作って見てるらしいし」

「それ、本当に救われるなあ」

「それに、ふだん馬鹿にしてたバラエティー番組って、それはそれでありがたいものだったんだ、なんて思うよ。」

「バカげてるけど、そういうのも、いるんだなって」

「実は私、自分のテレビ、まだアナログなんです」

「なんで？ お前この所内の地デジ工事の担当やったじゃないか」

「もともとテレビ屋が嫌いで」

「あとネットで、中国の人民網が、無理やり自分のものと主張していた日本の尖閣諸島のあたりの島々をごっそり寄贈するそうです」

「はいはいエイプリルフール。本当に冗談も下手な奴らだな。そうしたら気持ちまで嘘になるだろ。ほんと、だから中国は」

「でも、これは本気でありがたい。」

『大キリン』60メートル放水車はほんとうに有難い。

ホースも限界だが、それを取り替えながらやるしかない」

みな、口数が多くなってきた。

元気が戻ってきている。

いい兆候が進んでいる。

「玉突きで水を移送するのが、今日の作業だ。」

詳細はチームごとに確認してくれ」

「じゃあ、一本締め！」

みな、締めた。

「うちの会社の入社辞退、1名だって」

「そうか。ほかは入社したんだな。」

まあどうなるろうとも、誰かが電気を作らなくちゃいけないからな」

「なんか、俺達みたいなドMがまたどっさり入ってくるんだな」

「懐かしいな、入社の際の社長の話よりも、配属決まったときの先輩の話」

「ああ。みんな、『感謝もされず、高いと文句を言われ、停電して文句を言われ。それが一生

続く。事故ったら今度は末代まで続くぞ』って。軍曹トークみたい」

「あれテンプレートみたいになっているんだろうな。物の見事に今の俺達がそうだ」

「でも、辞めたくなかったか？」

「いいえ、ぜんぜん。

安全運転の楽しさを知ったら、もう戻れませんよ。

ただ、もう運転できる日は来ないでしょう」

「そうだな。すまない」

「いいんですよ」

4月2日(22日目)

免震棟の中で迎えた22日目の朝だった。

「本村、こんな時に辞令が出ていたぞ。所長の俺に内諾もなく。だから本店は本店って言われるんだよ。」

「おかげで俺も気づくのが遅れた」

所長が呼び、読んだ。

「本村辰巳、4月2日付を持って本店広報部部長付に任ず、ということだ」

「ええっ！」

皆が驚いた。

「本村さん、ここから居なくなるんですか」

「本店も人材不足だとさ。連絡が遅れたのはすまないが、本店は何を考えているのか」

所長は呆れ顔で辞令のメールのプリントアウトをひらひらさせた。

「せっかく頑張ってくれていたのに」

「みんな本村さんの独特の軽さに助けられてきたんです」

「それを一本釣りでの現場から引っこ抜くなんて」

皆が惜しむ。

「でも、本店ではあの通りの広報の状態だ。とてもまともに仕事の出来る状態じゃない。」

「みんなと離れるのはすごく辛いけど、みんなが総崩れしないためだったら、俺、どこにでも行きますよ」

本村の決断は早かった。

「どっちみち事態收拾のロードマップづくりもあります。本店でやることはあると思います」

「そうか」

所長は考えていたが、そうだな、と答えた。

「じゃあ、みんなで送り出しましょう」

「そうだな。夜のミーティングが終わったら、ちょっとリポDで飲んで送別会しよう」

「そうですね！」

その夜、免震棟とオフサイトセンターの間を往復していたバスと、本社の連絡バスを使って、本村は東京の帝都電力本店に向かった。

長い間の福島勤務で、久々の東京はバスの車窓から見ただけでも節電のために薄暗く、それが申し訳ないことこの上なかった。

電力マンとして、自らを恥じた。

そして、帝都電力本社ビルの前に本村は立った。

本社の前には何台ものマスコミの中継車とレポーターやカメラ、そして人ごみが集っている。

玄関に飾られた帝都電力の赤いIEPCOのマーク。

いつ見ても鮮血の色みたいだな。

「あの」

広報部のオフィスに入ると、皆対応に追われてそれどころではないようだった。

「どうしたんですか」

「海外テレビ局のWNNが都内のうちの独身者寮にアポ無し取材をしてきて騒動が起きているんです！

各マスコミがその話題に食いつく寸前です！」

本村は、本能が動き出すのを感じた。

「記者クラブへの申し入れの徹底を」

という上司に、本村はすぐに言った。

「私を取材対応の現場に出してください！ 免震棟から戻ってきたばかりで、言えることと言えないことの整理はできます」

みながびっくりした。

「あの福島から戻ってきたんですか」

「当たり前です。我々はちゃんと放射線を管理しています。帰ってこれないよな馬鹿なことはしません」

皆が言葉を失っていた。

「大丈夫ですよ、このとおりピンピンしてますし、髪もフサフサです」

そのきわどいギャグはうまく通らないようだった。

「ともあれ、海外マスコミはルール無視でどんどん来ます。こっちも情報を開示して彼らの憶測の余地をなくするのが肝心です」

広報部の若手が声を上げた。

「本村さんですね。私、広報部の草薙です。お待ちしていました」

彼は握手をサッと求めたので、本村も応じた。

「広報は今、同じく戦場状態です。しかもここから崩れかける可能性に瀕しています。

免震棟のジャック・バウアーがいらっしゃって、心強い限りです。

状況の引継ぎは私、部長補佐の草薙がさせていただきます」

彼が広報部内の案内を始めた。

「こちらが取材スケジュール調整、こちらが放映されているテレビの確認ブース、そしてこちららは」

「ツイッターじゃないですか！」

「ええ。ツイッターの公式アカウントを本店として開設しました。でも今はフォローはせず、リアルタイム検索で状況把握に使っているだけです。下手にリプライをしたら袋叩きですからね」

「そうですね」

「そしてこちらが新聞など紙メディアの調査部門です。今はウェブにアップされたメディアも調

査しています。

もちろん我々からアクションはできません。したらどうなるかはコンサルタントにお願いして講習を受け、対応の要点を共有しています」

「でも、じゃあなんであんな記者会見が」

「我々も直後は耐えられないほどの取材津波を受けました。今立て直しの最中です。

本来は事故を受けて広報ホームページの改修もするべきなのですが、計画停電時の対応に追われて正直手が回りません。

本村さんの仕事は、我々に対する原子力技術のアドバイスと校閲。そして本社チームが行っている事態收拾ロードマップの作成補助です」

「わかりました」

草薙はその答えにすこしおどろいた。

「いいんですか、こういう仕事で」

「大事な仕事だと思っています」

「そうですか」

草薙は言葉を選んで、口にした。

「正直、本社内でも事務職と技術職の対立があるのはご存知でしょう」

「でも、今は職責を超えて一致する時です。事務も技術も関係ないです」

「そう言って頂ける人、実は少なくて参っていました」

草薙は疲れた顔をほころばせた。

「ようやく援軍が着てくれた気になりました！」

その時、本社記者会見場の中継がモニタに送られてきた。

「ひどいですね、やっぱり」

「ええ。言質取り、揚げ足取り、煽り、誘導質問のフルコースですよ。こんなのを毎日やった上にマスコミとウェブもさらにむちゃくちゃです」

「TVは見ましたが、ひどいですね。広報として資料を渡すとかはできないんですか」

「それができないんです。渡せば息がかかったとか、帝電シンパと呼ばれ大スキャンダルになります。週刊誌もそのネタを探そうとつづいていますし。

なんとしても我々が悪意を持って皆を騙そうとしている、という図式を演出したいんです」

「ひどい」

「ええ。何が日本がひとつになろうなもんですか。現場でがんばっている皆さん、そしてそれを支える我々も害獣扱いです。

本当は具体的に補償や事態の收拾のための作業のことを話したくても、それは絶対にできません。したらとんでもないことになります」

「でも皆『目処が見えない』っていつているじゃないですか」

「目処は立っています。それが遅くなるか早くなるか。それは技術的な問題だとは本村さんもご理解でしょう。

でも、彼らの求めているのは目処じゃないんです。

今すぐ、あるいは数日中にすべてが解決するという魔法が空から降ってくると非現実なことを言って欲しいんです。

そしてそのとおりに魔法で解決しろと彼らは思っている。

腹を割って話す事など全くできないんです。

未だにこんな探り合いをしながら、誤解が誤解を呼び、その上言論の自由と誤解を広げる自由を混同している人間が多すぎるんです」

「保安院も仕事していないようですし」

「ええ。事務の私でも今回の尺度が5だとはとても思えません。でも彼らは責任をとりたくないと
思う余裕ができて、逃げ出し始めています」

「なんてことですか」

「保安院も政府も、我々ごと、あの福島県を見捨てる気です。我々の説明を聞かず、思い込みで
行動する。それが彼らの政治主導の現実です」

「わかっていたこととはいえ、本当なんですね」

モニタの向こうでは記者会見が荒れている。

「まるで免震棟に未だいるような感じです。外は放射能なみに危険なデマと罵詈雑言の嵐で」
本村の言葉に、草薙は頷いた。

「ここも、戦場なんです。

とりあえずご飯にしましょう。社員食堂が開いていますから」

本村はドキュメントを見ていた。

「ちょっと頑張れるようになった人材はごっそり引きぬかれて」

そう草薙が食事を持ってきた。

「騙すしかない。みな難しい本当のことより、分かりやすい嘘を好むんだ。

それをあなたが入社して以来、ずっとやってきました。

あなたたちがミスって、我々が説明するより先に経営が隠蔽を指示する。

そして安全神話を作れという。

本当に、この会社の問題は、エネルギー行政、さらにはこの国のすべての問題の縮図です」

「でも誰です、その隠蔽を指示してきたのは」

「どこから始まったかわかりません。でも、もはや引き継ぎ事項になっています。

私も広報に配属されてはじめてに聞かされたのがその言葉でした」

本村は天井を一瞬仰いだ。

「でも常識って常識じゃなかったんですね。

ホルモンや微量物質がいつから永久に効き続ける？

代謝ってないのか？

いつから人間はそんなに弱いものになったんだ？

累積量のほうが大事なのに、と思います。

専門誌『化学同人』だってちゃんと解説していますよ、分かりやすい絵入りで」

「彼らは聞く耳持たないどころか、不安を解明することもせずに不安がります。

そして、その不安が『基準値』を超えたとき、パニックが起きます。

それまでの常識ある人々すら、そういった逆の方向からの嘘の量に影響され始めるんです」

「原子炉のほうはまだ制御しやすいです」

草薙は頷いた。

「御理解いただけて嬉しいです」

4月3日(23日目)

「ポンプの設置が完了しました」

免震棟からの連絡を聞き、本村は安心と寂しさを同時に感じた。

「あれ、そういえば中居さんは」

「過労で医務室で点滴を受けています」

やはり！

本村は頼りを失ったことを感じた。

今回の震災で、多くの頼りにしてきたものを失ってきた。

発電所も、炉も、まともだと思っていた多くの人々も。

みな、地震と津波で失った。

それでも自分は生きている。

「ツイッターの状況は」

「ひどい状態ですよ。デマの巣窟です。しかもいくつかまともな人が疑問を呈すると『帝電社員』とレッテルを貼られ、正しい理解をと訴えると『安全デマ』と呼ばれ、その上『正しい理解』は統制的だと言われる始末です」

「くそ、ちゃんと説明してやりたいが」

「できません。した途端に彼らの餌食になるだけです」

「そうですか」

木村は草薙にいった。

「あの発電所で、我々は放水車やポンプ、そして電源という武器で事故と戦ってきました。

でもここにはそういう有効な武器がない」

草薙はまた深く頷いた。

「これじゃ忍耐だけしかない。反撃は」

「できません」

「でも頭を下げさえすればいいわけではないはずですよ」

「それが通じるとは到底思えないんです」

広報班の主任が口を挟んだ。

「これまで同じ説明をしてきました。

でも彼らは、勉強もしないし説明も聞きたくないのに安心だけ欲しいんです。

これじゃ騙す他に方法がないんです」

「でも信じましょうよ。分かる人は分かってくれます」

本村はいったが、彼は目を伏せて答えた。

「分かる人が少なすぎるのが問題なんです」

そこに連絡が来た。

「低レベル汚染排水を海中に放出するしかないとの判断です」

「そんな！ 廃棄物として保管してきたものを海に！？」

広報の皆が驚く。

「致し方無いです」

本村は理解していた。

「今、冷却の余裕がなくなったら、水で押さえ込んでいるものが大気中に塵となって吹き出します。」

海は広大で、希釈作用は大きいです。

事実すでになんどももの原爆実験の死の灰も、沈没した原子力潜水艦の炉内物質も海には溶けています。

今は漁業補償の手はずも必要ですが、大気拡散よりはまだましです。大気に拡散したらそれは降って土壌を汚染します」

「そうでしょうけど、絶対に受け入れられませんよ」

「そうでしょうね。でもこれしか方法がないんです」

記者会見

記者会見が始まった。

説明の後、ひとりの記者が原子炉等規制法違反と国際海洋法に違反するのではないかと突っかかってきた。

「そんなの承知してる！ もっと事態を悪化させたいのか！」

と本村は別室からモニタの向こうに食ってかかろうとしたが、説明にあたる広報スタッフは答えられない。

「準備させなかったんですか！」

本村は草薙にも食ってかかろうとした。

「待ってください、私たちもそれは承知しているんです」

「じゃあなぜなんの武器も与えずにあそこに仲間を！」

「我々には、彼らに反論することは絶対に許されないんです。

したら逆ギレと言われます」

そのモニタに、質問した記者の満足気な表情が写った。

「ドヤ顔って、このことなんだな」

本村はポツリといった。

「ウェブ中継の中継が続いています」

「彼らは何をしたいんですか？ これが見せ場とでも？」

「判断はウェブの向こうがします、ってことだそうです」

「そのウェブがデマだらけで自浄作用も機能していませんよ」

テレビ確認ブースでは海外テレビ局の放送も流れている。

「彼らは無知につけ込んで視聴率を稼ぎ、日本をその実験場にしているんです。

日本のことを対岸の火事と思って笑って、その上煙が来るのを少しのスリルとして喜んでいる」

「そんな！ 彼らだってそんな非人間的なことでは動いていないはずですよ」

「マスコミという存在は、人を容易に悪魔に変える恐ろしい物なんです」

そこに『本村さん』と声がかかった。

「本村さんの仕事です。事態收拾ロードマップがほぼ出来ました」

本村は会議室を出て、ふらふらと休憩室の椅子に座り込んだ。

「本村さん！ どうしたんですか！」

帝電本社の女子社員が声をかけた。

「なんだったんだろう、俺」

本村は憔悴の様子を隠せなかった。

「俺がいなくても同じじゃないか。」

「いや、俺なんかいないほうがいいんだ」

「本村さん！」

女の子がその手を握った。

「しっかりできないのはわかります。」

「でも、本村さんのおかげで助かった人がいっぱいいるんですよ」

「いっばいに迷惑をかけた。」

「街も海も山も汚染してしまった。」

「嫁さんと休日によくジェラートや牛乳を買いに行った観光農場の牛たちがいまどうなっているか。」

「いつも野菜や魚を分けてもらった近隣の農家や漁師のみんなも、俺の炬がダメにした。」

「俺がすべていけないんだ」

「そんな」

「女の子は考えた。」

「本村さんはこれまで、放射能が怖くなかったんですか」

「そりゃ怖いさ」

「彼はいった。」

「でも、もっと怖いものがあることに、気づかなかった。」

「人間の無理解と悪意がこれ程だとは。」

「放射線のほうがまだ扱いようがある」

「女の子は真剣に聞いていた。」

「なんで俺がこう思うか、聞くかい？」

「彼女はコクンとうなずいた。」

「まず、俺達は減点法でやってきた。」

「普通に運転して、悪いもの、放射能を外に出さないで電気をつくりつづけるのが100点。」

「それが、物をおっことした、壊したでどんどん減点されていく。」

「工夫しても100点以上にはならない。」

「だから、ガスを出したところでもう落第だ。」

「その上爆発までした。もう退学ものだ」

「でも、水素爆発ってなんですか」

女の子は逆に質問した。

「君も講習で習ったろ？ 原発と原爆は違う、って」

「はい」

「それはなぜ？」

「ウランが爆発しにくいようにしてあるからです」

「なぜ爆発しにくい？」

「それは」

彼女は口ごもった。

「まず、テレビなんかで説明する原子力の反応は、ウランの原子がぱかっと分裂して、中性子が出る。その中性子がいくつものウランを分裂させ、それぞれがさらに中性子を出す。すると倍々ゲームになる。

ドラえものの道具の『バイバイン』みたいなもんだ。『バイバイン』は付けたものを倍々に増やす。だからそれをつけた栗まんじゅうが1が2、4、8、16、32、64、128と増えていく。あっという間にあれは宇宙を埋め尽くす。あの話はその栗まんじゅうが増えて大変だということで、その栗まんじゅうを宇宙にロケットで棄てるんだけど、倍だからね。あの話は本当は最後宇宙も栗まんじゅうで埋まっちゃう。怖い話だったよね」

「ええ」

「その倍々ゲームが原子力で起きる。

すべてのものは分子でできていて、その分子は原子がつながってできている。水は水の分子がある。H₂Oね。で、これは水素原子のH2つと酸素原子O1つがくっついてできてる。この世の中はその原子がすべてを作っている。鉄はFe、金はAu、銀はAgってね。ウランもプルトニウムも、UとPuという原子で、性質は金属のひとつなんだ。

その原子は、簡単には割れない。

核には+の陽子となんともない中性子が集まっている。その惑星みたいな核の周りを衛星のようになると-の電子が回っている。

この電子ははじき合う性質があるから、-の電子は高速で軌道を回って周りから来るものをばんばんはじくバリアーになっている。

しかもその内側の核はえらく小さい。大きな野球場が原子としたら、外周を回るゴルフボールが電子、その中心にある野球のボールが原子核のサイズ。

中性子は電子のバリアーを貫通するけど、それが核に当たるのは、そんなにちいさくそりゃもう、サッカーで言えばボレーシュートで空中のボールを足で蹴るタイミングがいる。

そこで、ボールを減速させて、ボレーシュートのボールを足にあてやすくする。

その減速させるのが減速材。そうやって当てやすくすることで、その中性子というボールが出て、足にボレーで当たって、パスされて、それをボレーでさらにつなぐことができる。そのボールがサッカーだと1つだけど、核分裂ではパスする足でボールが増える。だからボールもどんどん増えるし、パスする選手の足もどんどん増える。

で、そのぱかっと割れるのがウランやプルトニウム、そしてセシウムとか放射性ヨウ素なんだけど、それは放っておけば自然に割れる。不安定で壊れながらいろいろな放射線を出す。中性子もその放射線の一つ、中性子線になる。

で、割れるときに熱も出る。それが崩壊熱。ざっくり言うところこんな感じ。

普通の原子はそうならない。水の水素も酸素もふつうは割れない。割れないから放射線をださない。出さないから普通の物質。でも割れたり原子から粒子を出しやすい物質がある。それが放

放射性物質。

放射性はつけることもできる。たとえば炭素。これは真ん中の原子核に+の陽子と中性子があるけど、陽子の数が変わるとつりあっている電子も数が変わり、原子の性質、物質が変わっちゃう。

でも中性子は-の電子とも+の陽子とも違うけど、陽子と一緒に核にいて、増えても減っても物質が変わらない。だから、同じ原子でも中性子の数が違う仲間がいる。それが『同位体』という。

だから、原子核に中性子をうまく当てると、普通の物質もその当たった中性子を出す、つまり放射性をもつ。これは全部自然に起きていることだから、放射性物質はけっこうある。たとえば人間の身体には炭素がある。この炭素も炭素14という放射性のあるのもある。あとカリウムもあるけど、これも放射性があるカリウム40がある。カリウムは特に人間の体の中に多く存在し、体重60キロの人間だと5500ベクレルはある。なにもない状態でも年間平均2.4ミリシーベルトを受け、外部被ばくなら宇宙から0.39ミリシーベルト、地面から0.48ミリシーベルト、内部被曝は食べ物から0.29ミリシーベルト、空気を吸うだけで1.26ミリシーベルトを1年間に受けている。僕ら放射線のプロは1年で50ミリシーベルトが限度とこれまで放射線障害防止法で規定されている。

これらは放射線を出すと、別の原子になる。その別の原子に半分が変わる時間がいつも決まっている。それを半減期って言う。放射性ヨウ素はヨウ素131は8.06日、ヨウ素133は20.8時間で半分になる。ウランは分裂するとセシウムや放射性ヨウ素になる。」

「でも原子の大きさがってどんなのです？」

「良い質問だね。」

原子がつながった分子、分子をつないでアミノ酸、それがつながって遺伝子やRNAといったものや、細胞の壁、細胞壁や細胞膜を作るタンパク質になる。単純なアミノ酸は水素2個に窒素1個のH2Nと、酸素1個と、水素と酸素1個ずつがつながったグリシン。炭素と水素が6個ずつ集まると例のベンゼンができる。

原子核	10兆分の1ミリ
原子	1000万分の1ミリ
グリシン	100万分の4.8ミリ
ウイルス	10万分の2ミリ
	ヒト遺伝子は30億文字
細菌	1000分の5ミリ
人間の細胞	1000分の6ミリ
	100分の2.5ミリ

人間はこの細胞の50から60兆個で1人。

うち毎日1000から2000個が異常に複製される。

10億個になるとガン検診で見つかるガン

ゾウリムシ

10分の2ミリ、0.2ミリ(目で見える)

だいたいこんなスケール。

原子核は10兆分の1ミリ、原子は1000万分の1ミリ、アミノ酸は100万分の、ウイルスは10万分、細菌や細胞は1000分の5ミリ、ゾウリムシは10分の2ミリ。

放射能の怖いところは、放射線の粒子がDNAをかえてしまうことなんだ。程度が軽ければDNAは自動的に修復する。できなければ細胞ごと死ぬか、あるいはがん細胞になる。でもがん細胞も人間の免疫はそれを識別し、やっつけることができる。

60兆個の体細胞のうち2000個が毎日普通に異常になるけど、普通は免疫がそれを処分するから何ともない。

それが10億0000万個、50万倍の量になるとガン検診で見つかる大きさのごく初期のガンになる。

ガンはその50万倍になるほど早く活発に分裂する性質を遺伝子の変化でもつことで発生する。それが骨髄にできれば骨髄のガン、白血病になる。骨髄は毎日血液を作るために活発に分裂活動をするから、すぐに修復もするけど、すぐに変化も起き、それが悪化することもある。

放射線障害は、まず始めに吐き気やだるさが起きる。

その次に白血球や血小板がつくれなくなる免疫低下がおきる。血液を作る骨髄は毎日刻々とやらずにちゃいけないから、どんどん分裂するし、それで影響も受けやすい。重い場合、1ヶ月から2ヶ月で死ぬ。

それより重いと皮膚障害で毛が抜けたりする。

さらにひどいと小腸の細胞のもと、小腸幹細胞が死滅して、下痢や細菌感染が起きる。重いと20日以内に死ぬ。

さらにひどいと、意識障害、ショック症状が起きる。こうなると5日以内に死ぬ。

放射線障害は、ほかにがんと白血病、ほかに遺伝障害も起きる。

「あれ、ガンで毛が抜けるって言いますよね」

「いい類推だね。それはこの脱毛とはちょっと違う。この脱毛は放射線で皮膚の細胞がやられて抜けるんだ。

でも、この免疫低下は、わざと起こすことがある。それが骨髄移植。

骨髄移植では抗癌剤や放射線で、異常化した造血組織や細胞を根絶する。これが前処置。

そして静脈から骨髄液、造血幹細胞を静脈から注入する。移植手術だけドメスは一切使わない。

順調に行けば2週間で骨髄が定着し、血が作られるようになり、一番順調だと3ヶ月で退院できる。

移植を受ければちゃんと治るけど、根絶処置をして移植を受けないで受けなければ1ヶ月以内に死ぬ。

抗がん剤は同じように活発に分裂する細胞に影響する。だから活発に分裂して人間を中から脅

かすガンにも効くけど、皮膚の毛の細胞にも働いて、毛が抜けるんだ。

「わかりました。で、発電の仕組みは」

仕組み

「えらくもどるね。でもいいよ」

「じゃ、原子炉のしくみを」

「そうだね。まず原子炉は、核分裂というボレーパスがどんどん連鎖して倍々になっていくのはわかった？」

「はい」

「で、そのパスをするウランは、元々不安定な原子核で、全部の陽子と中性子よりも少し軽い。なんでかという、その陽子と中性子をまとめる力が質量、重さの代わりになっているんだ。

覚えている？ $E=mc^2$ って式。有名な相対性理論の式だね。

つまり、これはE、エネルギーはm質量に光の速度の2乗をかけたのと同じ、という意味なんだ。光は基本的に速度が変わらないから、あとは質量とエネルギーは同じ。

だから、ウラン原子が壊れると、その核をまとめていたエネルギーが解放される。

このエネルギーが核分裂のエネルギー。ウラン1グラムが全部分裂すると8.2e10 Jになる。8兆2000億ジュール、1兆9585億カロリー、19億5850万キロカロリー。1時間にすると1.163ワットだけど、1秒にしたら8兆2000億ワット。

8.2テラワット。これはちょっとわかりにくいね。

ちょっと冗談で、途方も無さをたとえて映画「バック・トゥ・ザ・フューチャー」のタイムマシン・デロリアンがタイムスリップに必要な電力は1.21ジゴワットと映画の中のセリフがある。ジゴはギガgigaを英語読みするときにジゴに近い音で発音するらしく、とすると1.21ギガワット。デロリアンは1210億ワットでタイムスリップするんだ。1秒で全部ウランが分裂したら、その67倍のエネルギーを出すんだ。デロリアンが67回タイムスリップできる、って、すごいよね。

19.5億キロカロリーと同じ。食事の1食500キロカロリーの391万7千食分、15度の水だったらを1度上げるエネルギーの1兆9591倍。

このとおり、1秒で1グラムのウランの核分裂エネルギーを解放したら、そりゃ核兵器になるよね。事実、広島原爆では0.7グラムのウランが消えたという。でも詰めたのは50キロだった」

「でも、そのエネルギーになんで水を使うんですか」

「良い質問だね。まず、この大量の熱を取り出して電気にするのに水を使う。

熱を電気にする装置は、人間が持っている装置では、今はボイラーとタービンが一番いいんだ。

ボイラーは水を熱で沸かしてお湯に、さらに蒸気にして、それを蒸気タービンに吹きつける。タービンは羽根車で、吹きつけられる蒸気でぐるぐるまわる。

でもただ吹きつけるだけだと効率も悪いし、水もなくなってしまふ。

そこで、タービンにぶつかった蒸気は、今度は復水器で水に戻される。復水器には冷たい水のパイプがいっぱい通っている。それに触れて冷えた蒸気は、水に戻る。だから復水とかく。そうすると、蒸気は一気に体積が減って水に戻る。

その水をまた沸かす。するとまた蒸気になる。つまり循環するんだ。この蒸気タービンはこの場合、わかした温度と冷えて水に戻る温度の差が大きいほど力が大きくなるんだ。

タービンは小さな羽がいくつも付けられて、とても軽く作ってある。だから効率よくこの循環する水と蒸気で回転して、発電機を回し、発電する。

でも、ここで思うよね。沸騰水炉と、加圧水炉ってある。これは何か。両方とも水がつくね。これは、水を沸騰させるのが沸騰水炉なんだけど、このしくみはよく出来ている発明なんだ。まずもどるけど、ウランが分裂するときのボレーパスの話を知っている？

ウランは分裂すると、高速中性子を出す。つまりすごい速く飛ぶ、速いパスを出すんだ。

でもそれじゃウランがパスされた中性子を受け止められない。

そこで中性子とウランをぶつけやすくするために、中性子を減速させる必要があるね。

それに使うのが、大昔は黒鉛を使っていた。鉛筆とかにも使っているね。これをウランのレンガと、黒鉛のレンガを置いて組み合わせると、ウランから出た中性子が黒鉛のレンガを通過するときに減速され、またウランにぶつかり、パスが通って連鎖反応が起きる。

これでさっきのタイムスリップしそうなすごいエネルギーを取り出せる。

簡単な構造だね。これが黒鉛炉。もちろんそれで出た熱を取り出すために、ウランの周りに水の通る管を通して、水が湧くことでウランや黒鉛が溶けないように冷却する。溶けたら大変なことになるからね。

で、その水で発電もできるし、そして炉もちゃんと運転できるから、ウランを反応させ続けられる。その反応の中で、ウランはさっきの中性子の数が違って同じ名前の2種類のウランがある。それがウラン235と、ウラン238。

ウラン238は分裂するけど、ウラン238は分裂しないで中性子をもらってプルトニウム239になる。性質が違うウランがあるんだ。

プルトニウムって聞いたことあるよね。そう。核開発。

北朝鮮の核問題の時、話題になったのを覚えているかい？ 黒鉛炉を作るな、軽水炉を変わりにつくってあげよう、って。

これはなぜかという、黒鉛炉は簡単に作れて、しかもそれを使って原爆用のプルトニウムを作るのに便利なんだ。だから、原爆を作るときに作られた、世界初めての原子炉がこの黒鉛炉。シカゴ・パイル1号で、それをプルトニウム生産炉と言うんだ。

で、できたプルトニウムを使って、原爆を作ることができる。だから、北朝鮮にやめさせたかった。北朝鮮の黒鉛炉は発電機につながっていないんだ。

黒鉛炉は解ったね。でもなんで黒鉛炉は日本であんまりないのか。なんで沸騰水炉と加圧水炉を使うか。

それは、黒鉛炉には重大な弱点があるんだけど、それを発電で使った例がある。知っている？ それが黒鉛減速沸騰軽水冷却炉、RBMKというもので、それが、チェルノブイリ原発の炉だね。これは黒鉛で軽水、つまり普通の水を沸かして発電するけど、これが水を失ったらどうなるか。

反応がどんどん続いて止まらなくなる。暴走して溶けてしまう。しかも、水の流れがちょっと

悪いだけでも。出力を落とすと冷却が追いつかなくなって、暴走して、炉が溶けてしまう。これがメルトダウンっていう現象。

これがチェルノブイリで起きた事故。

チェルノブイリ

何故あの事故が起きたか、知らない人も多いと思う。

なんでかという、今回のうちの原発と同じように、電源が無くなったときの電源確保のための実験だった。

電源が非常電源に変わる間、電源がなくて冷却ポンプとかが動かなくなるといけないので、炉の出力が落ちて蒸気タービンがそのまま回っている余力で発電しようという実験だった。だから炉の出力を落とした。

ここで炉の制御をどうするかを話す。

炉はどんどん反応するけど、この反応が止まらなるととんでもないことになる。原爆みたいな爆発にはならないけど、でも発生する熱が、その熱を取り出す水の蒸発を追い越してしまい、炉が溶け出してしまう。これがメルトダウン。

それを停めるために、制御棒というのを炉に挿し込む。これは中性子を一気に吸い込んで、ウランに届かないようにするんだ。炉を制御するブレーキみたいなもの。

でも、この制御棒もただ入れればいいものじゃない。遅れると原子炉が熱で溶けたり変形してはいらなくなってしまいます。速やかに入れる必要があるけど、チェルノブイリの炉はもうひとつ落とし穴がある。

それが、原子炉のキセノンオーバーライドというのがある。ウランが分裂してできるキセノンの量で、中性子の数が増えたり減ったりしてしまう。

ブレーキがかかれば止まる、それがあたりまえだけど、チェルノブイリはブレーキをかけると、かかりすぎたりしなかったりするんだ。

それが、出力が落ちすぎると水が流れにくくなって、しかもそのままどんどん反応が止まらなくなる性質なんだ。

それは減速材の黒鉛と、冷却材の水が構造的に別々になっているために起きる性質。

だから、反応を進める減速材があっても、冷却材がうまく働かないことがあるんだ。

冷却の水は流れにくくなくても、さっきの中性子のパスを受けやすくする減速材、黒鉛が固定されているため、炉が暴走してしまう。

チェルノブイリではそれを避けるため、一旦下げた出力を上げた。

なんと、ブレーキを外したんだ。もちろんこれでは反応が暴走に向かう。

もちろんそれを防ごうとコンピュータが危険防止としてプログラムされたとおりに働いてやめさせようとする。

でも、そこで実験を続けるため、さらに非常用炉心冷却装置をふくめた安全装置を外して、さらに実験を続けた。

でも暴走しかかった出力がそのまま、蒸気圧が一気に上がって、そこで慌てて運転員は緊急停止ボタンを押し、制御棒を全て入れようとした。

でも、それも悪く働いた。制御棒の入る穴と水が入れ替わって、水が更に無くなって反応が強くなって炉が変形、制御棒が途中で止まり、ボタンを押した6秒後、蒸気の圧力が高まって、炉

の蓋も冷却水の配管も吹き飛ばす蒸気の爆発が起きた。

そのうえ、原子炉に使う合金が高温で水と反応して水素を作り、それが第2の爆発、水素爆発を起こした。

水素爆発

この水素爆発は、「水爆」とはぜんぜん違う。

水爆は重水素を核融合をおこして爆発させる爆弾。

でもこの原子炉の水素爆発は、学校で水を電気分解して作った水素に火をつけたことがあると思う。あの化学の授業でやったガス爆発なんだ。

有名なのだとツェッペリン飛行船の爆発。あれは飛行船を浮かせるために使われていた水素ガスに静電気の火花で引火した。今回の僕らの炉でもそれが起きた。

水爆の重水素の核融合は、ウランやプルトニウムの分裂とは逆に、重水素と三重水素、トリチウムの原子核をぎゅっと押しこんで融合させる反応で、これは核兵器に使う。

じゃあ、核兵器はどうなっているか。

始めに戻るけど、ウランの核分裂は原子炉ではボレーパスだったけど、原爆はずっと単純。ウランをとりあえず二つ置く。それを一気に一つにする。するとボレーパスだの何だの言わなくても、速いパスがバンバン飛んで、一気に超臨界というのが起きる。これが核爆発。

だから、二つを一つにすればいいから、広島原爆は細長い形で、大砲の先端にウランを、後ろの弾丸にもウランを置く。

ウランが臨界というのにならない量であれば起爆はしないけど、どんと弾丸を打つと一気に臨界量を越える。

臨界って言うのは、速いパスの中性子が、量が増えると遅くコントロールされなくてもウランに当たるような密度で、それを臨界量という。

で、原爆は熱も圧力も制御しなくていい。投下して起爆すれば、後はほったらかしでいい。だから簡単に作れる。とくに広島に落ちた原爆はものすごく簡単なものだった。だから広島では60キロのウランのうち、どんとぶつかった衝撃でほとんどのウランが飛び散っただけで、反応したのは1キログラムだけ。でもあれだけの被害を生んだ。核兵器はそれほど恐ろしい。

でも、60キロのウランを安全に運び、爆発させるのは大変だから、小さく確実に爆発させようとした。

それが爆縮型の核爆弾。爆薬を球形の打ち上げ花火のように作る。打ち上げ花火は爆発すると内側から外へ爆発するけど、核爆弾は逆で、外側から内側に爆発させる。爆薬の内側にプルトニウムを配置して、それを外側の爆薬で、精密に一気に内側に集める衝撃波で集めて、臨界を超えさせる。

もちろんその衝撃波は精密に作らなくちゃいけない。ちょっとでもずれると集中がずれて爆発が予定通り行かない。そこで衝撃波の調整がいる。そこで「火薬学」をつかって調整する。それは爆薬の衝撃波を計算しなくちゃいけない。衝撃波は1000分の1秒に7メートル以上進む。1ミリ秒ずればプルトニウムはバラバラになってしまう。

そこで米軍が長崎に落としたこの爆弾のために、フォン・ノイマンという今のコンピュータの

基礎を作った数学者が10ヶ月以上計算して、爆薬を32個にして32面体に作り、誤差をナノ秒単位にするための雷管、爆薬を起爆させる起爆薬をルイ・アルヴァレが作った。

数十マイクロ秒以下の誤差で起爆するその雷管が開発された。でもその雷管は高圧電流が必要で、その巨大な電源とともに、爆薬も2500キロも必要だった。

でも長崎型はプルトニウムをほぼ完全に爆発させられることが原爆実験でわかったために、長崎に投下された原爆以降、そのままこの爆縮型を主流に作られることになった。

雷管の起爆電圧を小さく、確実にする改良も進み、またその衝撃波の計算の為にコンピュータを使い、小さな爆薬で起爆できるようにした。今は直径30センチまで小型化している。この構造は秘密もまだ多く、それが例の核拡散防止のために守られている。

で、水爆はそのプルトニウム爆弾のさらに内側に空洞を作り、二重水素と三重水素を5グラムほど入れる。それだけでプルトニウムの核爆発で1億度となったその水素が核融合を起こす。

広島ではこの爆弾で14万人が、長崎では7万人が亡くなった。その悲惨さはよく知られている。熱で、衝撃波で、放射性降下物で、さらに二次被害も起きた。ガンも白血病も増加した。

そして水素爆弾のこまかな構造は秘密にされている。簡単には作れない。

これがいわゆる水爆で、その実験で多くの環境汚染が起き、また被爆した方も出た。第五福竜丸もそのなかにある。まず、原爆で起こす核融合で爆発をさらにおこすのが水爆。

原子炉の水素爆発は全く別。

で、軽水炉。沸騰水型や加圧水型。これは日本で使っている発電用の原子炉で、これは黒鉛炉とは全く違う。

まず、中性子の減速に水を使う。それもただの水。

でもこの水が中性子の減速の力が強い。しかも冷却も兼ねている。その分炉が小さくできるし、また冷却の水がなくなれば減速もなくなって反応が低下する。反応が暴走しにくい。

他の特徴として、黒鉛炉と生成するプルトニウムが違って、こちらは核爆弾用のプルトニウム239よりも、プルトニウム240が多くなる。これを分けて核爆弾用のプルトニウムを作るのは難しい。このプルトニウム240は原子爆弾に使うと小さな爆発を先に起こして爆発威力が落ちてしまう。

だから、核開発に使いにくい。

でも弱点がある。それは蒸気の温度が低いこと。蒸気タービンは温度差があればあるほど効率が良くなるけど、火力発電所では600度まで上げられる蒸気が300度程度。なぜかというと、燃料を覆う管の合金に中性子を吸収しすぎない特殊な合金が使われ、それが450度以上になると変形してしまう。

だから300度前後でしか運転できない。

それと、急激に出力をかえるのが苦手。熱が急激に上がったたり下がったりすると燃料被覆管、ウランを収めた管を劣化させ、亀裂ができたりする。

あとキセノンオーバーライドというのがこれでも起きる。でも日本では対策が進んでいる。黒鉛炉みたいに、止めるのが難しいわけではない。低出力でもそこから出力を上げるときに若干のしにくさはあっても、無理に出力を上げ下げしなければ普通だし、また止めれば危険ということはない。止めれば止まる。

しかも運転中に温度が上がり過ぎると、冷却水が沸騰して泡が増え、その泡のために水で減速される中性子が減り、反応が自然に低くなる「自己制御性」という良い性質がある。しかも負荷、発電の必要量が増えると温度が下がって泡が減り、減速が強くなって反応が強くなる。負荷に合わせた負荷追従運転ができる。でも、それは日本ではやっていない。

「じゃあ、今回の事故はなぜ」

「まず、止めることはできた。でも、止まってもウランは熱を出し続ける。連鎖反応がなくても。それは運転時よりはるかに割合が小さくても、原子炉の出力は大きいから、結局熱が大きな量になる。

そのための冷却が必要だったけど、電源が全部無くなって、冷却が止まった。

水が蒸発し、また金属と水と熱が反応して水素が発生した。その水素にはウランの分裂してできた放射性物質が混ざっている。

それは原子炉の建屋内にたまってしまった。引火したら大変なことになる。

そこで弁を開いて放出した。もちろん、それが僕らにとって敗北だった。水素を排出すること

で水素爆発は防いでも、それまで封じ込めていた放射性物質が漏れる。

それだけで最悪だったのに、よりによってその残った水素が爆発した」

「沸騰水型の効率が悪い所はもうひとつ。冷却水が減速材を兼ねているけど、これをそのまま復水器に入れると、その復水器はたくさんの細管で出来ているため、その穴から放射性物質を含んだ冷却水、汚染水が漏れる。それが危険なのでタービン建屋を含めてあちこちを頑丈に造っている。でもその分、守るべきものが多く、廃棄物や廃炉による核のゴミが多く厄介だ。

だから、その水を1次冷却水として、復水器にはもう一つの別の水をいれる方式がある。それが加圧水型原子炉だ。

1次冷却水は格納容器内に収まっていて、2次冷却水はこれもまた蒸発と復水器を循環し、そこでタービンを回す。

2次冷却水の水の復水器は海水で冷やすので、海水にそのまま汚染が広がらない。こういう二段構造でやるぶん、効率は沸騰水型より若干悪い。それに1次冷却水は蒸気発生器が別になっていて、炉心内で沸騰しない。熱した1次冷却水は液体のままだから、再循環がしやすい。その蒸気発生器や、格納容器内で1次冷却水を循環させる配管やポンプが複雑になってしまい、保守が難しい弱点がある。

でも制御棒が上から入れられる構造はいい。沸騰水型は制御棒を下から入れるため、入れても抜け落ちることがあるが、加圧水型ではそれはない。

だけど、これでも事故が起きた。それがスリーマイル島原発事故だ。

2次系の樹脂を再生する作業を運転中にしている、そのときに空気配管に水が混入し、主給水ポンプとタービンが停止、蒸気発生器に水がいなくなり、1次系を含む炉心の圧力が上がって安全弁が開いた。

それが悪いことに熱で安全弁が固まって閉まらなくなり、どんどん1次系の水が蒸気になって無くなっていく。

自動的にスクラムという動作で制御棒が全部入って反応を停止させ、ECCS、非常用炉心冷却装置が水を炉心に注入した。

しかしその時、炉内の圧力が下がっていて冷却水が沸騰してしまい、その泡が水位計の指示を押し上げた。

それを見た運転員が、冷却水が多くなりすぎたと間違った判断をして、そのECCSの注水を手動で止め、さらに1次給水ポンプも止めた。

その結果、安全弁が2時間20分空いたままで500トンの冷却水が流出し、炉心上部3分の2が露出して蒸気内にむき出しになり、崩壊熱で燃料棒が破損し、危険のために周辺住民を大規模避難させた。

でも水を入れなおしたため、事故は収まった。でも炉心が溶けて燃料の45%、62トンが圧力容器の底に溜まってしまった。

放出した放射性物質は250万キュリー。イギリスのウインズケール原子炉事故に次ぐ被害になった。

ABWR、改良型沸騰水型では制御棒を水圧に電動駆動を追加し、またポンプを圧力容器内に収めている。

うちの古い型では沸騰の調整のために水を圧力容器外の再循環ポンプで加圧して圧力容器に戻し、ジェットポンプでさらに炉心に送り込んでいる。

でもインターナルポンプは圧力容器の内側に並べたプロペラ付きの魚雷みたいなもので、これで冷却水を下におくる。それが圧力容器の真下で上に流れて炉心に行く。

これだと冷却水を引き出す配管、再循環系配管がなくなっていて、冷却水がなくなる事故が起きにくい。

でもこれにも弱点がある。インターナルポンプのプロペラは、高速回転機器だ。それを格納容器内に置くことの危険性はある。

東海村臨界事故は、ウラン溶液を均質化、つまり混ぜてならずときに、中性子があつまりにくいような形につくった『貯塔』という水槽でやるはずが、『沈殿槽』という水槽でやってしまった。

その『沈殿槽』は冷却水につつまれていて、形もウランが一気に集まる形で核反応が起きやすい。

事故はひどいことに、『溶解塔』で行うとマニュアルで決まっている作業を、ただのバケツでやる裏マニュアルがあり、しかもそれすらも守らなかった。

そのため沈殿槽に硝酸ウラニル水溶液を入れすぎて、その冷却水が中性子の反射材になって、そのウラン溶液が臨界になった。

作業員の一人はその沈殿槽にウラン溶液をいれているときに「青い光がでた」という。

その事故は、何回にも分けて中に突入して冷却水を抜き、反応を止めた。そのあと中性子線を止めるためにホウ酸水を注入した。

この時の作業員は20グレイ、20シーベルト以上の被曝をして、放医研で骨髄移植を妹からして一旦よくなったが、2ヵ月後心肺停止で、蘇生しても多臓器不全がひどく、83日後に死亡した。結局核爆発時の爆心なみの被曝だった。

もう一人、10グレイ被曝したのも骨髄移植をして、警察への証言をするまでに回復したが、急変して211日後に多臓器不全で死亡した。

4.5グレイの被曝をしたのも骨髄移植をして、それが成功、回復して退院した。

3人ともみな、放医研に着いたときは、医者が驚くほど健常者なみに元気だったという。

近代医学が被曝者を治療した例は、これが大きな例になった。

ただ、シーベルトだのベクレルだのと言っても、まだ未解明なことがいっぱいある。
それにかこつけて、危険だ危険だと言うものもあれば、安全だ安全だというものもある。
どちらも正しくないと思う。
正しく怖がるべきなんだ」

「エネルギーの未来で、原子力は、続けるべきなんではないですか」

「もう今は考えたくない。正直。」

原子力の1kwhあたりの発電コストは、経産省では原子力は5.9円。漁業補償や廃棄物の処理費用は含まれている。水力の13.6円、石油10.2、石炭6.5円、LNG（液化天然ガス）6.4円。原子力が一番安い。でも反対派は運転年数40年で原子力5.73円、LNG4.88円、石炭4.93円、石油が8.76円、水力が7.20円。液化天然ガスのほうが安く着くという。

でも、天然ガスを海底から掘ろうとしてメキシコ湾での事故でとんでもない環境汚染を起こしているし、石油もそうだ。石炭は露天掘りが出来ればいいが、日本ではさんざん落盤やガス爆発で死んでいる。そしてそれらを燃やす火力発電はガスをどうしても排出する。日本ではがんばって特に有害なガスを減らしたけれど、有害ガスをダダ漏れさせている国が日本の隣にもある。水力はダムでさんざん峡谷が沈み、また貯めた水が悪化し、下流は水を失って河原の生態系が変わるといふ。地熱発電はいいように思えても火山ガス、硫化水素の問題をはじめとして、水の汲み上げでの近隣温泉への泥水の混入や温泉枯渇・地盤沈下、硫黄流出、そして温泉は深く掘れば必ず出るなんて簡単なもんじゃない。問題は山積みだ。特に地熱発電技術は日本は発達していても日本国内でできない理由は根深い。決して原子力業界の妨害なんて生やさしい問題じゃない。だって地熱発電だって業界団体組んで開発して海外につくりまくっているんだ。そこで高温岩体技術もあっても、それがいつ実現するか。できれば大きい出力を安定的に得られるけれどね。保守も難しく無いとされているし。

ちなみに世界最大出力の地熱発電プラントを納入したのは日本の富士電機システムズで、140メガワットにもなる。これをなぜ日本国内でできないか、それが単なる原子力業界の責任だけにするのは短絡だ。温泉観光も大事だし、自然公園も大事だ。

リスクのない発電システムなんてのはない。エネルギー保全則のとおり、無から有を生み出すことは未だに人間は全くできないんだ。

泊原発3号機は2926億円で 91.2万kw。

水力は 3800億円で160万kw。

天然ガスは 100億円で 11万kw。

石炭は 1275億円で 70万kw。

風力は 120億円で 6.6万kw」

地熱は 数百億円で 6万kw

「プルトニウムを始め、放射性物質が怖いのは、放射線を出すところ。放射線による変化、被曝は化学反応と違う。化学反応は分子を変質させるけど、そのためには分子と原因の毒が接触しなくちゃいけない。

でも放射線は接触がなくても分子が変わってしまう。その分子が変わって怖いのは、細胞壁とかは変わっても代わりが効くけど、遺伝子が変わっちゃうと遺伝子はコピーされて細胞を増やすものだから、コピーミスで本来の体の細胞以外に変化してどんどん増えると、臓器の機能をむしばんで、体全体も悪くする。がんとはそういう状態。だからガンが一番怖い。

放射線はいろいろなものがある。体を貫通するX線その他、アルファ、ベータ、ガンマと線があるけど、目にも見えなければ熱くもない。でも遺伝子を壊す強さを持っている。あとはその壊れた遺伝子を免疫がやっつける力が勝つか、壊れた遺伝子の増える量が勝つかの勝負になる。免疫が勝ちやすくなるには放射線を浴び続けられないことが大事。

で、その放射線をどう数えるか。それは測定器具で調べる。

一番簡単なのはフィルムバッジ。これはレントゲンのフィルムみたいに、浴びた線の量で色が変わる。だから浴びすぎているのが簡単に分かる。しかも安く作れる。だけど現像しなくちゃいけない。

ガラス線量計は、そのフィルムのかわりに特殊なガラスを使う。これは現像しなくても紫外線を当てれば放射線を浴びた量で光がかわる。現像がいらない。

この二つは、普通の原子力施設などで働く人がバッジにしたりして持ち歩き、昔の原子力潜水艦では1日ごとに全員分現像したり紫外線を当てて調べて、放射能漏れ、放射線を出す粒子が漏れていないかを調べていた。

ガイガーカウンターは放射線の量を調べる。これがあのピーピーという測定器。放射線の種類までは分からないけど、80年前に発明されていて、AMラジオと簡単な部品で自作することもできる。これは現像も紫外線も要らない。その場でリアルタイムでわかる。シンチレーション検出器も安く作れる。

こういった簡単な計測器に、「はかるくん」というのがある。日本科学振興財団が教育用で学校にだけレンタルしている。今はちょっと出払っているけど、小さな機械で簡単に測れる。1時間あたりのマイクロシーベルトの単位で数えて、1ミリシーベルト近くまで測れる。

半導体検出器はさらによくて、エネルギーも計れるしその放射線を出す放射性物質も調べることができる。これが線量計。精密度も非常に高くできるし、簡単なわりに精密に測れることもできる。これを使えばリアルタイムで、しかも強さを量だけじゃなくてそのエネルギーも一緒に調べられ、危険がよくわかる。でもガイガーカウンターとかに比べれば高い。フィルムバッジは使い捨てだから、線量計はもっと高い。

普通はこういう線量計は測定員がもって、チームのなかで専門に調べている。

でも、今は働く全員が持っている。

で、放射線管理手帳、放管手帳というものをみんな持っている。これはそういった線をどう浴びたか、どこで働いていたか、放射線の教育を受けているか、健康診断をどう受けてどういう結果を持っているかを記した手帳で、顔写真とIDも入っている。これをもつことが制度で決まっています、これでどう浴びているかを管理する。

で、なんでプルトニウムを調べなかったか。これは、こういう検出器ですぐにプルトニウムは名指しでわからない種類で、サンプルを取って実験室で分析しないと出てこない。でもプルトニウムは怖いという。

それはプルトニウムの放射線は2万年たたないと半分にならないから。でも出すのはアルファ線で、紙や数センチの空気で遮蔽できる。だから余計見つけにくいけれど、遮蔽もしやすい。だからこれまでの核実験でプルトニウムは6トン以上が大気中にばらまかれたけど、大丈夫。空は広いし海も広い。そして普通に環境にあるプルトニウムは水に溶けにくい。致死量は口で1150ミリグラム、吸入で0.26ミリグラムというけど、重くて水に溶けない。毒性は化学的には鉛や水銀より低く、ヒ素と同じぐらい。そしてアルファ線はラジウム温泉で逆に浴びにみんな行ってる。だから、放射線が怖いのかヒ素みたいな毒が怖いのか、そのどっちかはいまだどっちかはっきりしていない。

むしろセシウムとかのほうが怖い。線も遠くまで飛ぶし、遮蔽もプルトニウムよりは難しい。とはいえ遮蔽はできるし、また半分になる時間も8日から30日。

中央操作室は100ミリシーベルト。それを全部ヨウ素で内部被曝すると2シーベルト。IAEAでは危険を5シーベルトというから、まず問題ない、と原発で働いている人たちはそれで働いている。彼らはべつに子供も作っているし、その子に特別な障害も出ることはない。

これもざっくり数えている人も多いし、目安が欲しくて計算している人も多いけど、簡単に計算して相関性を正確に出すことは、正直実は今の医学ではまだ出来ていない。

だから東海村の事故が例になって、その研究が続いている。なにしろ人間の体はこういう物質を吸収し、排出するのにもものすごい仕組みを持っていて、それを使ってさまざまな危険を防ぐように出来ているけど、人間はそれをまだ全て解明出来ていない。

反核団体でさえ250ミリシーベルト以下では目に見えた変化はない、と言っている。彼らはそれ以下でも「見えない変化は確実におきている」という。その見えない何かってなんだろうね。現代のナノテクの時代で見えない何かって何か。

ただ、素人が計算しても雑な計算でしかない。だからデマやパニックの元になる。

ざっくりした簡単な計算は自分の安心のためにしか使えない、って分かってくれてればいいんだけどね。でも僕らはちゃんと管理し、それでこの仕事と体でどんどんそういう関連性の解明のデータを積み重ねている。

正しく怖がるのは難しいけど、僕らはちゃんと管理して、それで生きている。

それが秘密にして管理せず、浴びっぱなし、つきっぱなしでやったのがチェルノブイリだし、第五福竜丸もそう。怖がりようがない状態で怖いことに突入してしまった。

で、今は怖がって、怖いことに入っているかどうか分からない。

僕らは怖がりながら、それでも怖いこと以上に大事なものの引換を考えて、そして怖がって調べてくれる仲間と一緒に慎重にすこしずつやっている。

どれがいちばんいいか、それは自分で考えるしかないけど、僕らはそれを常に考えて、だから漏らしたくないし、漏れてショックだった。その上水素爆発まで起きてしまった。

まとめ

分かりにくい本当のことより、直感でわかる嘘のほうが信じやすい、という人がいる。

でも、わかったでしょ？ もともと僕ら技術屋は正確でないとうまく計算して仕事ができないから訓練しているけど、でも正確さのためのわかりやすさと、それがどういうものか分からない人に分かってもらうためのわかりやすさに翻訳するのを面倒がる。

ミリのマイクロだのと言ってもすぐにはわからない人が多いし、ましてなんとかの10の何乗なんて指数表記も、僕らは分かりやすくて、普通の人は何乗の時点でわからなくなる。

思えばそうだよな。学校でも算数できない人がいっぱいいたし、数学もみんな間違える。僕らは少しできたけど、赤点とっているのはいっぱいいたし、だいたい分数もできないひともいる。それでも大学に入ったりする。

でも間違えないで大学に入って、さらに間違えない人は成績が良くて工学部や医学部に入る。

そこでさらに計算や実験をして、みんなでそれが間違いかどうかを議論する。そうして正しいことを積み上げていく。

それで学問はここまで出来ているし、工学もその結果で作られて橋を作ったり飛行機を飛ばしたりロケットを打ち上げたりしている。

でも、それよりも人間の体はもっと難しい作用があって、それで僕らは命を守られ、命をずっと、何十万年もリレーしている。途中にはいろんな危機があった。それでもつないできたその作用のすごさを、僕らはまだはつきりと分からず、でも解き明かそうと頑張っている。

でも、広島も長崎もいまは観光地でみんな住んで生きているし、木も草も生えている。チェルノブイリですら人がまたあの近くに入っている。あの壊れた炉の、燃料も危険な廃棄物も溶けて一緒になった塊を収めた石棺のすぐそばで、普通のレポーターが、防護服も着ないで、「危険はまだつづいています」とレポートしている。あの石棺の中はものすごい放射能なのに、そのすぐ外は防護服も要らない。これがどういうことか、それは自分で考えてみるしかない。

今のこの免震棟の外は、防護服を着ないと危ない。でも、石棺に封じ込めれば、きっとああいふ状態にまで戻せる。石棺は最終手段だけど、今僕らはそれよりましな状態で、がんばって封じ込めようとしている。

説明する人も、いろいろ喩えを言うけど、それもうまい人と下手な人がいて、下手な人は混乱を起こす。

そうになると、正確のほうで分かりやすいかたで言う。たとえもせず、聞く人が数学ができないのか、算数ができないのか調べるのも面倒がって、解ったかどうかのリアクションも見ないで言って、それで「まあとりあえずたいしたことはない」といきなり言ってしまう。逆に責任を取らなくちゃいけなくなると、いろいろ言葉がごちゃごちゃになる。「ただちに影響はない」とか、「基準値」とか。

そして数字を出すとき、どういう値？ と聞かれると、「通常値の何倍」と答える。

もともとの通常値が低いから、異常が起きれば何倍にもなる。

それがこんな事故になれば、何千倍にもなる。当然だよ。異常と言っても漏れるだけ、おならがすこし出ただけで無茶苦茶言われるものが、飛び散った。その上壊れないものが、程度はあっても、事実壊れたんだから。

「わかったかな？」

彼女は、息を吐いた。

「わかったけど、正直、疲れました」

「そうだね。うん、もういいよ。」

「僕も話疲れた」

本村は笑った。

「ギルティシンドロームになりかけだったんだ、俺」

「炉が運転できて心も心の運転は慣れていないんですね」

「でも俺は炉を爆発させ、そして命も失うところだった」

「そんなことはないですよ。問題の根が深すぎるんです」

「このことを、あとでちゃんと広報して。それが君の仕事だ。」

もう、いい加減なことで騒がないように、そしてその騒ぎを怖がって、取り繕ったり、かくしたりしないように。

「いつそれができるかわからないけど、いつかそれができるように」

彼女は深く頷いた。

「じゃあ、戻ろう」

本村は缶コーヒーを買って一気に飲み、そして広報部の部屋に戻った。

提案

「広報の相手をちゃんとデータ化すべきです」

本村は提案した。

「すでにリサーチ会社のアンケートはありますよ」

そうひとりが何を今更という感じで言う。

「そうじゃないんです。

理解度は正規分布するはずです。

上位は非常に明晰な専門家。

中央に大きな、説明すれば分かってくれる人々。

下位に言ってもわかる気のさっぱりない人々。

私たちはその中央の人々に訴えるべきです。

上位はデータをそのまま渡す。

下位にはそう思われたら、『どういう形での具体的な解決を希望なさるんですか』という『魔法の言葉』を使うべきです。

それと、いらないフリップは捨ててください。

細かいパワーポイントも意味がありません。

正確さ、精緻さを追求するのは上位陣に任せ、中央の普通の人々を向くべきです」

「それは大衆扇動と言われるぞ」

「扇動ではありません。冷静に、決意を持って訴えかけるのです」

「できるとは到底思えない」

「でも、それが正しい道です」

そのあいだに、福島事故現場から、すでに事故前から貯められていた低レベル排水が放水された。

それをしなければ、高レベル排水が結局漏れるか、あるいは高レベルの粉塵が飛び散ることになるのだ。

4月中旬にかけて

それからもひどい報道が続いた。

「自分たちは福島原発を福岡原発と間違えても言葉だけの訂正、しかも放射能がくると煽り、ひどいと言われればツイッターのツイートだけの謝罪」

「彼らマスコミに責任なんて言葉はないですよ。責任を要求はしても、責任をとったことはごく僅かです。謝罪広告なんて彼らにとっては全く痛くも痒くもない」

「事態は何ヶ月単位と言っているのに」

「数日間で解決しなきゃいやなテレビ病です」

「こんな大きな事故なのに」

「それが正しく怖がれないってことでしょう」

「段取りを示せ、って、本当のことを言ったら叩く気満々じゃないですか。それに農水省が阿呆なのは今に始まったことじゃない。でも出荷制限の極限がいるのは当たり前じゃないか」

本村は吐き捨てた。

「『きちっと』している人がなんで福島を福岡と間違えるんだよ」

「『きちっと』という人間が『きちっと』していたためしなしです」

草薙が頷く。

「部分図を出すだけで、それがどういう意味か解説しないまま図に追加して判断できるようにしない」

「セキュリティの問題があると上から指示が来て」

「セキュリティなんてもう今回のこれが超えられなければなんの意味もありません。

もう原発どころか電力が作れません。電力のない世界ではセキュリティで何を守るんですか。意味が無いです」

本村は一気にいった。

「分散電力も大事ですが、それは地震がおきたらどれだけの火災を起こすか。

各家に燃料電池なんて、灯油でさえ阪神淡路大震災で大火事の原因になったのに。

準集中型の地域発電が妥当としても、この地域社会をまとめるのが大変な状態で責任を持った管理ができるものか。

印刷できる太陽電池が発明されたなんていっても、それが今年の夏に間に合うのか。

もう脱電力しかないです。

地方自治の時代が合併の補助金で喜んでなんの積立もせず、困れば国から掴み金。

そして政治は団結するかと思えば分派活動と翼賛批判。

トレンドを見ない放射線報道。

もともと通常の『事故の起きる予兆』を見つけるための数値を壊れた炉に適用しても、現実的なリスクの判断に使えるわけがない。

そこで暫定基準値を作ったが、それも意味が無い一喜一憂に使われている。

トレンドを見ることを主張すべきでは」

「今のマスコミにはどれも能力が足りません。

彼らもまた、説明するより騙すほうが楽だと思っています」

「読者も視聴者も信頼しないから、テレビ離れ書籍離れと見放されるのに」

「恐ろしい相互不信の悪循環ですよ」

その間も事態收拾と復旧のためのロードマップづくりのチームとの協力について、本村は広報部と掛け持ちで発電所の状態の報告を行った。

技術的な話を通じるあいてと行う作業の幸せを感じてしまう。

人間の敵はやはり人間なのだと思わされ、悔しかった。

でも、それをぶつける相手もなく、ただただ作業に没頭したかった。

4月12日(31日目)

「ひどい話だ、被災から1ヶ月目にまた巨大余震だなんて」

「ええ。完全に自然に振り回され、嘲笑われている感じですね」

「地球を冷やすなんて言っていたのが、いかにバカだったか。

その前に我々は自分の頭を冷やすべきだった」

「保安院が事故評価尺度7を発表しました」

「何を今更。

機械的に尺度に当てはめるだけなら小学生にもできる。

計算し試算したスタッフもこれじゃ責任逃れの道具を作っただけじゃないですか。

どこまで現場の苦労や努力や意志を悪用したら気が済むんですか！」

「それを言っている識者がいたが、もうマスコミは彼を無視するようになった。

それどころか彼らを御用学者と言ってはばからないんです」

「それをいうならそういう彼らは逆に無用学者じゃないですか。揃いもそろって人々をむちゃくちやにして」

本村は嘆いた。

「もうやめてしまえ。14歳の分かりやすい馬鹿な意見のほうが受けるんだ。

しまいにはそれを通信キャリアの会長が100億の寄付で裏付けするに至ったんだ。

自分とこの通信サービスの復旧より先に。

しかもそれを綺麗事だのなんだのという言葉で言って、正しいことをしない」

その時、草薙は渡された書類を見て、震えだした。

「どうしたんですか」

「正しいからこそ、それは出すことができないんです。

正しいことに耐えられない人々がどっさりいる。

経営サイドからの判断です。

横須賀と横浜の火力発電所が復旧した。

しばらくはこれで計画停電なしに需要は満たせる」

本村ははっとした。

「何が言いたいんですか」

「これで本村さんの言う8割は堅い。

あとの少数に金を撒き、あとは少数を孤立させることができる、と」

本村は、慄然とした。

「私たちはこんなことのために、放射線の中を戦ってきたんですか!？」

広報部長が現れた。

「この世は地獄だ。君の見たとおり。

それでも、俺達は生きていかなくちゃいけない。

マスコミはもう復興マネーとそれをめぐる政局の話のほうに移動しつつある。

原発利権なんて、これから動き出す莫大な復興マネーに比べれば小さなものだ」

「でも防災計画なき国土計画は田中角栄が日本全国を乱開発に走らせた列島改造論の再来じゃないですか」

部長は頷いたが、言った。

「たしかにその秘蔵っ子が闇將軍と呼ばれた末にまたこの今いろいろやろうとしているらしいが」

部長は目を伏せた。

「それは君の仕事ではないんだ」

本村は、言葉を失った。

記者会見場では、事態収拾までのロードマップが発表されていた。

その作業で疲れの色が出ている本村だったが、決意の色は強かった。

「本村さん、やってもだれも聞きませんよ」

草薙が言う。

「わかっています。

でも、ロードマップを作って、これをやらないと私の仕事は終わりません」

「決意、本当に固いんですね」

「ええ。悲しいですが」

会見が終わり、続いて技術担当からの総括的な説明です、と司会が告げた。

「本村と申します」

その前で、彼を無視して記者たちが次々といなくなっていく。

そしてウェブ中継の人間さえもがいなくなった。

本村ひとりの発表が始まった。

聞いてくれるのは、紛れ込んだのか何かわからない女の子がひとりだけだった。

「悲しいけれど、私はこれでこの帝都電力をやめます。

そして、物言わぬ隠者として暮らします。

中居さん、すみません」

そして、聞く人も、ウェブ中継のカメラすら入らない会見が終わった。

最後に、女の子も何も言わずに去っていった。

そして、帝都電力が原発の事態収拾のロードマップを発表した日、本村はそのロードマップ作成作業を最後に、帝都電力をやめた。

暗い夢

新宿のとある鉄道会社の本社オフィスの守衛室で、本村は夜勤に入っていた。
仮眠をしていると、あの夜勤のときの1号炉の夢を見た。

稼働中の1号機。

中居当直長の思い出。

いつもの緊張の中、軽口を少ししていた時だった。

「ちょっと静かにしよう」

中居当直長がそう言った。

「なんですか」

低く流れる唸り音が聞こえる。

「これが48メガワットの音だ」

中居が微笑んだ。

「いいですね」

本村は気づいた。

この発電所のすべての職員が、すべて職責を全うし、すべての機器が正常に働いて、発電している音。

巨大なこのプラントが生きている音。

「まさに48メガワットの調べですね」

「これが、多くの愛すべき人々の灯となり、不安の闇を照らすんだ」

「このために、僕らは頑張ってきたんですね」

「ああ。この当直が終わったらバルコニーに行こう。

おわって、また、うまいたばこを吸おう」

あの日々は戻ってこない。

涙ももう枯れ果てていた。

「大丈夫か」

そこにいたのは、樋田社長だった。

「偶然時間があるんだ。

君は中途採用だね。

夜勤は大丈夫か？」

本村は話した。

あの会見の話も、会見での説明も、そしてその後のことも。

樋田社長は聴き終え、頷いた。

「わかった。いい話だった。

なかなか辛い世の中だ。

だが、私は屈服しない。

だからこのビルを建てた。

この鉄道会社の社長でいるのも。

残念な行政の話はなんども見ている。

この国にエネルギー政策を本当に論じれるときは、初めから最後まで来ないだろう。

それでも生きるしかない。

ただ、私は思う。

私は屈服しない経営者でありたいし、君たちの会社を経営できる栄誉を、絶対に忘れない。

そして、私は、仲間とともに、屈服しない」

本村はその真剣な目に、心を打たれた。

その本村の机の上には懐かしい原子力工学の教科書、そして電子タバコのLEDの明かりが、宿直室のガラスに反射していた。

そして、携帯にメールが届いていた。

私も帝都電力をやめました。

でも、原子力は続けることにしました。

廃炉にするにしても、原子力技術がなければ後始末ができません。

だったら、不屈の意志で、原子力を頑張り続けます。

日本の原子力はもうだめだと思いました。

でも、今は世界が連携しています。

日本の馬鹿げた責任回避騒ぎから離れ、研究と後進の育成に頑張ります。

あの本村さんの会見は、見る人は見えています。

正しいことは、必ず最後に正しい結果に結びつきます。

本村先輩、あきらめないでください。

先輩の語ったあのメガワットの調べを、私も、そして私の弟子たちも聞きたいと思っています

。

どんなに形は変わっても、エネルギーの本質は、絶対に変わりませんから。

エネルギーを侮るのも、恐れすぎるのも人間ではありません。

正しくおそれ、正しく見抜くということは、人間の大事な基本です。

そのためにも、私は原子力を続けます。

本村は、どうしていいかわからず、ただ声を上げようとした。

計画停電をまぬがれたこの新宿でも、街の暗さはかわらなかった。

>endtext

書きました。

ハーフフィクションと言いながら、可能な資料には当たりました。事実と矛盾しないようにしましたが、しかしフィクションです。ここは難しいところで、たとえば運転の様子などは資料を見てもシーンにできないような無味乾燥な記述のものばかりで、逆に公開されている議事録などの資料には、行間に安全を目指す人々の叫びのようなものがにじみ出ているようなものもあり、それもまた驚きました。

巨大技術といっても、現代社会はそれなしに暮らしていけないどころか、もはや生きて行くことすらできないのです。

それを陰謀論や性悪説、そして都市伝説的な過酷労働の物語での厳罰主義を我々が取る限り、彼らは無謬の立場をとり、本当の問題点を明らかにするよりも、優しい嘘で騙すしかないという諦念に落ちるだけでしょう。

でもその世界に絶対に安全も安心も存在しないのです。そしてこの相互不信の図式はどんな分野でも起こりうることなのです。

この問題を調べれば調べるほど、その図式に尽きると感じました。この図式はもう終わらせなくてはならないのです。調べられることは自分で調べ、自分の安心は自分で得るしかないのです。

そして、安易な責任論だけに終始するのではなく、原因究明と起きてしまった事故については復旧・事態収拾と迷惑がかかった人々への補償と、我々大消費地で彼らに「迷惑施設」と押し付けていながら無関心でいたことについて、率直に反省をするときなのです。そこにおいてのみ、我々は結束できるのです。

しかし現実にはエネルギー問題では空虚な議論が続いています。結局何も変わらず、また無謬と厳罰の対立の中の無関心が続くでしょう。もう理解と信頼を得る覚悟も失われた人が増えました。次々と人々が自己批判と言いながらこの一刻の苛烈な批判から逃れようとし、それだけで必死です。

しかし、彼らにも我々にも、起きた事故から学び、再び起こさない努力をすることが求められているのです。事故の規模は大きく、また現在放出された汚染も厳しい水準です。それは否定できません。でも我々は自然によって、自然に人間の力だけで立ち向かうことの無理を学びました。自然の脅威には自然を味方につけた上で対抗するしかないのです。

そして自然の脅威に屈服するだけであれば、我々は生き延びることもできないのです。

一番安易なのは、屈服して何も学ばないことです。そんなことをしていたら、人間のどんな技術のどんな分野でも大きな災厄は発生し、同じことを繰り返すことになるのです。

それこそ生活を犠牲にすることとなった地域の人々に、本当に申し訳ないというものです。

今はただただ私も言葉を失うことばかりです。事故そのものよりも、事故をめぐる人間の思惑や誤解、そして暗黒面の大きさにただただ驚きます。

今回の震災では、あまりにも多くの化けの皮が剥がれすぎ、悲しい思いをしました。

被災者や津波や地震によって失われた人々の悲しみに比べればはるかに軽いものだとはいえ、私個人にとっては大きな衝撃でした。

でも、我々は生きる以上、考えることも理解しようとすることも、そしてものごとをより良くすることから逃げてはならないのです。

原子力を死に筋の技術と判断する必要があるかもしれませんが、それでも現在もすでに多くの核廃棄物が各原発構内に処分できずに保管されています。それをどうするのか、我々はそこから逃げることはできません。

そしてそれから逃げ、そもそも原子力技術さえなければ、というなら、じゃあそもそもタイムマシンで原子力工学だけでなく、放射性物質の発見、さらにはそれ以前からあった放射性物質の誕生の宇宙開闢を操作しなきゃいけない事になるでしょう。

原子力技術の中には無害化の困難な放射性物質の核種を変えて無害化しやすくするアイデアもあります。またこのような放射線にさらされる過酷環境で人間の代わりに活躍するロボットもすでにありますが、これもさらに改良できるはずです。

人間は工夫する動物で、火を使うことを覚えた存在です。

あなどれば火傷をし、恐れれば単なるお湯もわかすこともできません。

そして、ちょっとのその時々のもうで、技術を「枯れた技術」などと言っては断じていけないのです。それは怠惰と傲慢、悔りでしかない。技術は全て枯れてはならないのです。枯れたと思った瞬間、そこに予断と油断が生まれ、事故の芽が生まれるのです。そんな技術に対しての甘さは絶対に許されてはならないのです。

そして人間らしい尊厳を失ってはならないのです。でなければ今現場で働いている人も、避難を余儀なくされている人々に対して申し訳ないのです。

彼らは我々の尊厳に基づいての、彼らの尊厳への支援と理解を求めているのです。

こんなことが言えるような立場ではないと自分を思いますが、しかし私はさまざまなお会いした方々の尊厳を信じ、私も尊厳をもちたいと思っています。

これからこの話もすこしずつ改訂していくと思います。それがブックログというものの良さだと思っています。が、大筋での変更はないと思います。

本当にここまでお読みくださってありがとうございました。

2011年4月20日

米田淳一

ステーション・ブラックアウト

<http://p.booklog.jp/book/23631>

著者：米田淳一

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/yoneden/profile>

発行所：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/23631>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/23631>